



別冊

模擬試験 解答・解説集

NMAT 模擬試験【第1回】

検査Ⅰ	言語能力適性検査 [解答・解説]	2
検査Ⅱ	非言語能力適性検査 [解答・解説]	10

NMAT 模擬試験【第2回】

検査Ⅰ	言語能力適性検査 [解答・解説]	19
検査Ⅱ	非言語能力適性検査 [解答・解説]	28

JMAT 模擬試験【第1回】

検査Ⅰ	言語能力適性検査 [解答・解説]	40
検査Ⅱ	非言語能力適性検査 [解答・解説]	51

JMAT 模擬試験【第2回】

検査Ⅰ	言語能力適性検査 [解答・解説]	60
検査Ⅱ	非言語能力適性検査 [解答・解説]	72

検査 I 言語能力適性検査

解答・解説

▶ 本文
106～119ページ

(1) 正解 E

文脈を整理して、一つの癖＝特性＝[] という形を読み取る。次に空所の後にある「すなわち」に注目し、[] = 「由来の遠い、一民族ないし一人の自ら加減し得ないほど無意識圏につらなる微妙な点」であり、[] の内容が説明されていることを読み取る。

(2) 正解 C

空所の前後に「運動」と「休養及び睡眠」の語句があること、また「、」で並べられていることから、同列で扱える語句が入ると推測できる。そして、これらが健康の保持増進において必要なものと述べられており、健康に焦点を絞っているため、「食事」が適切である。

(3) 正解 C

空所の直前にある「死んでしまっては」という表現に注目する。「身もふたもない」は、率直で含みがなく、話が続かなくなってしまうことのとえとして用いられる語で、ここでは「死んでしまっては何にもならない」という意味になるため、Cの「身もふたもない」が正解となる。「のっぴきならない」は、避けることも退くこともできないという意味の語で、ここでは死ぬか生きるかの選択が問われているわけではないので不適。

(4) 正解 A

①の直後にある「圏」という語に注目する。「文化圏」「勢力圏」という語はあるが、「自然圏」という語は一般に聞かれない。②は、「医者

の判断よりも患者の判断」「存在判断でなくて価値判断」という表現より、「哲学」が入る。

(5) 正解 D

①を含む文の中間にある「～にせよ」という語に注目し、この語と呼応する副詞を考える。①は「たとえ～にせよ」と呼応するので、「たとえ」が適切と考えられる。Aの「まるで」は「～のよう」、C・Eの「ぜんぜん」は「～ない」と呼応する。

②は直前の「ただ」、直後の「流されて来た」という表現から判断すると、『何となく』『ぼんやりと』流されて来た」というニュアンスが読み取れるので、「漫然」が適切である。「厳然」は「容赦なく」「断固として」といった意味なので、ここでは適切ではない。

(6) 正解 E

選択肢はいずれも「化」につながる語句である。空所の直後にある「・」は、同格を示す符号であり、空所には「専門化」と同じ意味の語が入る。また、「学研究領域」の〔 〕化と専門化は、「学問の高度化」によりもたらされるという文脈であるので、空所には「細分」が入る。

(7) 正解 B

空所の直後に「ような」という語がある点に注意する。また、空所の前に「沢山の豆電燈」とあり、「AのようなB」という直喩になっていることを読み取る。豆電燈が沢山ついている情景から、にぎやかな明るい様子を読み取る。

(8) 正解 D

空所の前に「驚いた」「こんな仕掛までであろうとは」とあることから、空所には「想定外」という内容を示すDの「予想できない」が正解となる。「予知」は「予想」と似ている語だが、「予想」は将来どうなるか前もって見当をつけることで、「予知」は将来どうなるかを前もって知ることである。ちなみに、「予言」は将来起こる物事を予測して言葉にすること。

(9) 正解 B

「不幸な人間であった」一茶が、「すべてを俳句として表現した」ことが述べられている。各選択肢の前に「だから」を付けて読むと、Bが自然につながる。「悲しみも喜びも憤りも、すべてを俳句として表現した」から「人間臭のする句を残した」となるのは適切である。

- A 「不幸な経験を積み重ねてきた人」が「豊かな人間性を備えている」とは述べられていない。
- C 「すべてを俳句として表現した」と述べられており、「世間への怨み罵りを表現するため」と帰結させるのは適切ではない。
- D 「不幸な人間であった」とあるが、不幸であるからこそ素晴らしい俳句を作れるとするのは適切ではない。
- E 芭蕉や蕪村の作品との比較は述べられていない。

(10) 正解 D

「概念史研究」や「概念編成史研究」は、歴史的条件がかかわっているため、手間がかかり、多くの課題が手つかずで、誤った見解のまま残される事態が引き起こされている、という内容の文である。これらの研究をどう進めるべきかを考えると、「歴史的条件を解き明かしながら進める」とするDが適切である。

- A 概念の移入には、言語についての歴史的条件がかかわっているが、言語を学ぶということが主旨ではない。
- B 「知の体系と価値」については触れられていない。
- C 「一人の優秀な研究者」については触れられておらず、それを「待つほかにない」ほど万策が尽きたという内容でもない。
- E 「地理的条件」については触れられていない。

(11) 正解 C

所得水準は世界のトップクラスだが、トップクラスの豊かさは実感していない、という文である。「理由」が問われる問題では、「なぜなら～だから」の「～」の部分に各選択肢を入れて考えるとよい。「所得水準では世界のトップクラス」なのに「豊かさを実感しているとはいえない」になるのは、所得に表れない面が遅れているからと考えられるため、Cが適切である。

- A 「円高」と「個人消費の拡大」に因果関係はあるかもしれないが、「個人消費の拡大」と「豊かさを実感しない」こととの関連性はわからない。
- B 消費者が「節約志向になった」とは述べられていない。
- D 「経済成長」と「環境問題」は因果関係があるかもしれないが、「環境問題」と「豊かさを実感しない」こととの関連性はわからない。
- E 経済成長でモノやサービスが多様化した側面はあるかもしれないが、「個

性」と「豊かさを実感しない」こととの関連性はわからない。

(12) 正解 B

問題文を読んだあと、「実際に～」という語句を付けて各選択肢を入れてみると、問題文を裏付ける記述が見えてくる。

- A 「基礎科学の衰退」と「研究の副産物」に関連性はない。
- B 「ビジネスに直結するか」を見るということは、「産業の当面の振興に気を奪われる」につながり、裏付けの記述といえる。
- C 「基礎科学の衰退」と「思いがけない発想」に関連性はない。
- D 「巨大な施設が必要な大型研究」とは規模のことであり、「技術・産業の当面の振興」とは利益のことであるから、適切ではない。
- E 直ちに利益を生むことが重視されれば、「応用の利く研究」でなければ予算は割かれない。

(13) 正解 B

「次元」とは「ものを考える立場や世界」のことである。

(14) 正解 E

「これら」の「ら」が複数を示す語であることに注意する。また、下線の部分が段落の最終文にあることから、「これら」が、前の文の内容を示すことを理解する。

(15) 正解 B

「ない」は、形容詞か助動詞である。助動詞は動詞等について特定の意味を添える役割を持つが、下線の前は「は」であるので、この「ない」は形容詞である。

(16) 正解 A

空所の前の部分が「宗教を損ねることの代わりに」とあるので、「科学」を「損ねる」と同義のことばが入ると考えられる。

(17) 正解 B

ア 「科学の世界の分別は無分別である」の部分が不適。

イ 正しい。

ウ 「宗教の世界の分別は二つのものを対立させ」の部分不適。

(18) 正解 B

「畏怖」の意味は、おそれおののくこと。「畏（おそれ）」と「怖（おそれ）」という類似の意味を持つ語の組み合わせとなっている。したがって、「豊富」が適切である。「地震」は主語と述語の関係、「寒暖」は反対の意味を持つ語の組み合わせ、「着席」は動詞と目的語の関係である。

(19) 正解 F

下線部分を含む段落が「しかし、そうした目に見える効用」と始まっているので、直前の段落で述べられているのは「目に見える森の効用」であると推測できる。「目に見える森の効用」とは、雨宿りができる、避暑の効果がある、というほかに、防音機能、水や空気の浄化機能、温度調整機能、災害防止機能などがある。これらからアは不適。イは「感覚的な良さ」なので「目に見えない」もののようであるが、傍線部を含む段落の冒頭の「そうした」が前の段落全体を指すのでイは不適。したがって、解答はウとなる。

(20) 正解 E

「森の機能に関する実用的な提案」は第4段落に述べられている。

ア 13行目に「水や空気の浄化機能」という表現があるので、適切である。

イ 落葉については、27行目に「葉が落ちる、……という理由から、役所などに伐採の依頼をしてくる数も少なくありません」という表現があるが、実用的な提案としては扱われていないので、適切ではない。

ウ 14行目に「ヒートアイランド化を抑える温度調整機能」という表現があるので、適切である。

(21) 正解 C

下線部分の文頭の「これ」は直前の内容を指しているので、最終段落の内容を読み取り、選択肢を検討する。

ア 宗教的意識については、21行目に「心のよりどころのひとつであった宗教的意識が薄らぎ」という表現があるが、29行目で「森を畏怖していた昔へ

戻るべきだと、懐古主義的なことを言いたいわけではありません」と述べられている。したがって、適切ではない。

- イ 「人類だけの地球にしてしまったとしたら、われわれは一日も生きのびることはできない」と述べられており、「人間が森を管理することには触れていない。したがって、適切ではない。
- ウ 直前の文で「ヒトは、『森の寄生者』の立場でしか、持続的には生きていけない」と述べられているので、適切である。

(22) 正解 A

選択肢の記述が文中のどこで述べられているかを探するのが基本である。その際、アとウにあるカッコ内の語句は見つけやすい。また、イの「明治維新」といった語句も、述べられている箇所を特定する手がかりとなる。

- ア 「森の再生」という語句から、第2段落を見直す。8行目の「気がついてみると……」以降に同様の表現があるので、適切である。
- イ 20行目に「明治維新あるいは戦後、……宗教的意識が薄らぎました」と述べられているので、適切ではない。
- ウ 25行目に「市民が緑化を要求するケースが増えて」という表現があるが、それは「生態学的理解によるものではない。「生活のゆとり」や「裸地や荒地地を見かねて」という理由によるものであり、適切ではない。

(23) 正解 D

前文の「そのように」「それ」が何を指しているかを考える。2行目の「そのように」はニーチェの言葉を指し、2行目の「それ」は「各人」を、3行目の「それ」は「もっとも遠いもの」を指していると考えられる。これを踏まえると、「そのひとつ」とは「何なのかよくわからないもの」のひとつと読みかえることができる。つまり、その主語となる「もっとも遠いもの」が適切である。

(24) 正解 C

理由はそのあとに述べられることが多い。下線部分以降を見ると、第2段落、第3段落、第4段落に「考えは始める」例が述べられている。

- ア 自分の足は「わたしの足である」ことは同意できるが、その足が「わたしである」ことには同意しかねることの具体例として述べられており、それ

よりうろたえることが謎というわけではない。

- イ 自分の身体の所有物だとすれば、その足や腕は交換可能なものと考えことはできる。しかし、最終的に自分の身体が全部別のもつと入れ替わったとしたら、「別のわたしになった」と言ったほうが自然と述べられており、「わたしでなくなるわけではない」とは述べられていない。
- ウ 第2段落から第4段落までの考察により、第5段落で「わたしたちは……何の確かな答えももっていないことにあらためて気づかされるのである」と述べられている。この文脈により、「わたしと身体」の関係が「わたしが身体である」のでもなく、「身体を所有している」のでもないことを「謎」と捉えていると考えられるので、適切である。

(25) 正解 E

選択肢の格助詞「の」の意味や用法をそれぞれ考える。

- A 体言（「こと」）の代用として用いられている。
- B 「のような」という意味のたとえを示す。
- C 主語を示す。
- D 並列を示す。
- E 「母の持ち物」という所有を示す。

(26) 正解 B

空所は19行目と32行目にある。1つめの空所の直前に「譲渡や」とあり、譲渡と並列で用いられることばが入ると考えられる。また、その前に「所有物は」とあるので、所有物に対して可能になることばが入る。この時点でCは適切ではない。また、2つめの空所の目的語は「身体を」であり、身体に対して可能になることばが入る。第4段落の「身体の一部を切除して、別の物体をそこに接続したり注入したりする」「自分の身体が全部別のもつと入れ替わったとしたら」といった表現から、「交換」を入れるのが適切である。

(27) 正解 A

下線部分の直後に「思考実験ではない」こと具体例が示されている。

- ア 26行目に「別の物体をそこに接続したり注入したりする作業はすでに行われている」と述べられており、適切である。

- イ 切除した身体の一部を培養するという記述はない。
- ウ 他人の身体の一部と自分の身体の一部を交換するという記述はない。

(28) 正解 E

本文と照らし合わせて選択肢の内容を検討する。

- ア 第4段落で「わたしは身体をもつ」という考えの考察がされているが、最後に「『わたしは身体をもつ』という最初の命題を否定しなければならない」と述べられており、適切である。
- イ 第4段落で「身体が全部別のものと入れ替わったとしたら、……わたしは別のわたしになったと言ったほうが自然ではないだろうか」と述べられており、「わたしがわたしでなくなるわけではない」とは述べられていない。
- ウ 第5段落で「わたしは身体であるのでもなければ、身体をもつのもないとしたら、……わたしたちはそれに対して何の確かな答えももっていないことにあらためて気づかされる」と述べられており、適切である。

検査Ⅱ 非言語能力適性検査 解答・解説

▶本文
120～134ページ

(1) 正解 D

問題に関係するのは「性別」と「居住地」なので、それらを統合した表を作成する。問われているのは色のマスであり、逆算して求めると、9 (人)。

	東京	横浜	計
男性	17	8	25
女性	16	9	25
計	33	17	50

(2) 正解 E

問題に関係するのは「居住地」と「学生」なので、それらを統合した表を作成する。横浜に住んでいる高校生を x (人) と置くと、東京に住んでいる高校生はその2倍なので、 $2x$ (人)となる。

縦の列で計算式を作ると、 $2x + x = 15$ 。これを解くと、 $x = 5$ 。問われているのは色のマスであり、 $17 - 5 = 12$ (人)。

	大学生	高校生	計
東京		$2x$	33
横浜	$17 - x$	x	17
計	35	15	50

(3) 正解 B

男性の大学生の人数がわかっているので、「性別」と「学生」を統合した表を作成する。

色のマスは、女性の高校生の合計の人数であり、その内訳は「東京に住んでいる」か「横浜に住んでいる」となる。問題文より、「東京に住んでいる」のは5人なので、「横浜に住んでいる」のは $7 - 5 = 2$ (人)。

	大学生	高校生	計
男性	17	8	25
女性	18	7	25
計	35	15	50

(4) 正解 C

I の情報よりPとQの発表順は、以下の2パターンが考えられる。

1	2	3	4	5
P			Q	
	P			Q

II の情報よりRとSを埋めて残りにTを入れると、以下の6パターンとなる。

	1	2	3	4	5
①	P	R	S	Q	T
②			T		S
③		T	R		S
④	R	P	S	T	Q
⑤			T	S	
⑥			T	R	

- ア Rが4番目に発表したパターンはないので誤り。
 イ Sが2番目に発表したパターンはないので誤り。
 ウ Tが1番目に発表したのは、パターン⑥が考えられるので、必ずしも誤り
 とはいえない。

(5) 正解 D

(4) でまとめた表より、各情報からどのパターンに決まるかを検証する。

カ パターン①、②、③、⑥があてはまり、決まらない。

キ パターン④、⑤、⑥があてはまり、決まらない。

ク パターン②、③、⑤、⑥があてはまり、決まらない。

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ パターン⑥のみあてはまる。

カとク パターン②、③、⑥があてはまり、決まらない。

キとク パターン⑤、⑥があてはまり、決まらない。

(6) 正解 A

表と条件より、P社の男性と女性のそれぞれの育児休暇取得者数を求める。

女性の従業員数は20.0%、育児休暇取得者数の割合が15.0%なので、女性の育児休暇取得者数は

$$5000 \times 0.2 \times 0.15 = 150 \text{ (人)}$$

問題文より、育児休暇取得者数の男女比は2:15なので、男性の育児休暇取得者数は

$$150 \times \frac{2}{15} = 20 \text{ (人)}$$

また、男性の従業員数は80.0%なので、

$$5000 \times 0.8 = 4000 \text{ (人)}$$

よって、 $20 \div 4000 = 0.005$ 百分率にして、**0.5 (%)**。

(7) 正解 G

表より、Q社の女性とS社の男性それぞれの育児休暇取得者数を求める。

Q社の女性は37.5%、育児休暇取得者数の割合が10.5%なので、

$$3200 \times 0.375 \times 0.105 = 126 \text{ (人)}。$$

S社の男性は60.0%、育児休暇取得者数の割合が3.0%なので、

$$500 \times 0.6 \times 0.03 = 9 \text{ (人)}。$$

したがって、 $126 \div 9 = 14$ (倍)。

(8) 正解 C

R社の従業員数を a と置く。育児休暇取得者数について、全体から女性を引いて男性を求め、全体に占める男性の割合を計算すればよい。

全体は育児休暇取得者数の割合が7.0%なので、育児休暇取得者数は **$0.07a$** (人)。

女性は25.0%、育児休暇取得者数の割合が16.0%なので、育児休暇取得者数は、 $a \times 0.25 \times 0.16 = 0.04a$ (人)。

よって、男性の育児休暇取得者数は、 $0.07a - 0.04a = 0.03a$ となる。

一方、男性は75.0%なので、男性の従業員数は **$0.75a$** と表せる。

したがって、男性の育児休暇取得者数の割合は、 $0.03a \div 0.75a = 0.04$ 。

百分率にして、**4 (%)**。

(9) 正解 C

表より、S社の女性の育児休暇取得者数を求め、100人増えたときの従業員に

占める女性の育児休暇取得者数を計算すればよい。

女性は40.0%、育児休暇取得者数の割合は10.5%なので、育児休暇取得者数は、 $500 \times 0.4 \times 0.105 = 21$ (人)。

女性が100人増加すると、従業員数は600人になる。このとき、育児休暇取得者数(21人)は変わらなかったので、従業員に占める女性の育児休暇取得者数は、 $21 \div 600 = 0.035$ 百分率にして、**3.5** (%)。

(10) 正解 E

T→Sの順番、PとQの間に2人いるという条件より、考えられる発表の順番は次の4通りとなる。

- ① P→T→S→Q→R
- ② Q→T→S→P→R
- ③ R→P→T→S→Q
- ④ R→Q→T→S→P

ア ③ R→P→T→S→Q、④ R→Q→T→S→P が考えられるので、必ずしも誤りとはいえない。

イ Rは1番目か5番目なので、誤り。

ウ ③ R→P→T→S→Q、④ R→Q→T→S→P が考えられるので、必ずしも誤りとはいえない。

(11) 正解 F

(10)でまとめたパターンより、各推論を検証する。

カ Sの次に発表するのはPかQなので、誤り。

キ ③ R→P→T→S→Q が考えられるので、必ずしも誤りとはいえない。

ク ② Q→T→S→P→R、④ R→Q→T→S→P が考えられるので、必ずしも誤りとはいえない。

(12) 正解 C

(10)でまとめたパターンにサからスマまでの情報をあてはめる。

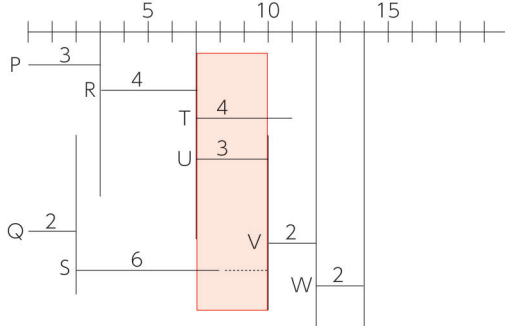
サ ① P→T→S→Q→Rか④ R→Q→T→S→Pか、決まらない。

シ ② Q→T→S→P→Rか③ R→P→T→S→Qか、決まらない。

ス Pの発表が4番目なので、② $Q \rightarrow T \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ で、ただ1通りに決まる。

(13) 正解 D

問題文の条件を整理し、次のような工程表を描く。



Uと並行して作業を行っているのは、SとTとわかる。

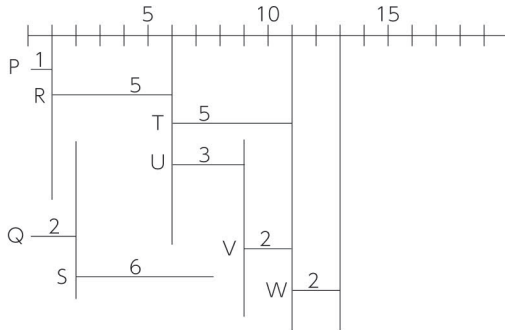
(14) 正解 E

(13) より、完成に必要な工程と時間は、 $P(3) \rightarrow R(4) \rightarrow U(3) \rightarrow V(2) \rightarrow W(2)$ である。

QとSはVに取り掛かる前に終了している必要があるが、2分の余裕があるので、QとSのいずれかが2分遅れても完成までの時間には影響しない。

(15) 正解 C

変更された条件をもとに工程表を描く。



Pが1分、Rが5分、Tが5分となり、R、T、U、V、Wの開始時間が変更される。

$P(1) \rightarrow R(5) \rightarrow U(3) \rightarrow V(2) \rightarrow W(2)$

(13) より、変更前にかかっていた時間は14分。

全体の終了時間は13分となり、1分短縮される。

(16) 正解 B

問題文より、昨年順位は、 $S \rightarrow R \rightarrow P \rightarrow Q$ 。

Ⅲの情報より、Rは3位か4位であることがわかる。

ア Rが3位するとき、Pが1位、Qが2位、Sが4位の可能性があるので、**必ずしも誤りとはいえない**。

イ Qは昨年4位だったので、今年は1位から3位までとなる。

Rが3位するとき→1位か2位、Rが4位するとき→1位か2位か3位なので、RはQより順位が上になることはない。したがって、**ありえない**。

ウ アと同様、Pは昨年より順位を上げるので、**必ずしも誤りとはいえない**。

(17) 正解 F

(16) の情報にかからクまでの情報をあてはめる。

カ Pの順位が上がっても、1位か2位が決まらない。

キ 「Qの生産量がPとRの平均値」ということは、PとRの間にQがいることになる。Rが4位するとき、Qが2位か3位が決まらない。

ク SがRより順位が下のとき、Sが4位になるが、1位と2位が決まらない。1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ $P \rightarrow Q \rightarrow R \rightarrow S$ 、 $P \rightarrow Q \rightarrow S \rightarrow R$ などが考えられるので決まらない。

カとク PとQが1位か2位が決まらない。

キとク $P \rightarrow Q \rightarrow R \rightarrow S$ に決まる。

(18) 正解 F

- ア Qが1日目から作業を始めると、3日目にも作業を行っているので、必ずしも誤りとはいえない。
一方で、 $P \rightarrow Q \rightarrow R \rightarrow S$ のとき、Qは3日目に作業を行っていないので、どちらともいえない。
- イ Sが5日目に作業を行った場合、Sの前後は4日間になり、 $P+Q$ 、 $P+R$ 、 $Q+R$ のどれを行っても4日間を作ることはできないので、誤り。

(19) 正解 B

- カ Pが3日目と4日目に作業を行うのは、Pが2日目～4日目まで、または3日目～5日目までのとき。
Pが2日目～4日目の場合
Sが1日目に作業を行い、5日目からの5日間をQとRで行う。
Q→Rのとき、Qは5日目～7日目
R→Qのとき、Qは7日目～9日目
Pが3日目～5日目の場合
Rが1日目と2日目に作業を行い、6日目からの4日間をQとSで行う
Q→Sのとき、Qは6日目～8日目
S→Qのとき、Qは7日目～9日目
よって、Qは必ず7日目には作業を行っており、正しい。
- キ Rが5日目と6日目に作業を行った場合、7日目～9日目はPかQのいずれかが作業を行うことになり、1日目～4日目をSとPかQのいずれかが行う。
S→P→R→QまたはS→Q→R→Pのとき、Sは1日目に作業を行う。
P→S→R→QまたはQ→S→R→Pのとき、Sは4日目に作業を行う。
よって、どちらともいえない。

(20) 正解 E

問われているのは犬または猫のいずれか一方を飼っている男性なので、**男性についての表を作成する。**

犬または猫のいずれか一方を飼っているのは、色のマスであり、 $20 + 33 = 53$ (人)。

		猫		計
		○	×	
犬	○	21	33	54
	×	20	26	46
計		41	59	100

(21) 正解 E

問われているのは犬と猫の両方とも飼っていない女性なので、**女性についての表を作成する。**犬と猫の両方とも飼っていないのは、色のマスであり、**24** (人)。

		猫		計
		○	×	
犬	○	28	14	42
	×	34	24	58
計		62	38	100

(22) 正解 C

(20) と (21) の表より、犬は飼っていないが猫は飼っている (**犬×・猫○**) 男性と女性のそれぞれの人数を足せばよい。

男性は20人、女性は34人なので、 $20 + 34 = 54$ (人)。

(23) 正解 A

までの経路は、1時間の休憩を除き、**8時間を超えて勤務したときの計算となる。**

n は直前に8が引かれているので、**8時間を超えた分の時間**となる。

8時間までの時給は1000円で、22時を超えてから加算される給料は X となる。

に入る式は、

8時間超えの給料 + 8時間までの給料 + 22時を超えてから加算される給料となるので、 $n \times 1200 + 8 \times 1000 + X = 1200n + 8000 + X$ である。

(24) 正解 E

②→③→⑤の経路は、下記に該当する人である。

- ・ 終業時刻が22時を超えている。
- ・ 終業時刻から始業時刻を引いた値が8時間を超えている。
- ・ 休憩の1時間を除いた勤務時間が8時間を超えていない。

(25) 正解 E

⑤の経路は、終業時刻から始業時刻を引いた値が8時間を超えている場合で、③の直後の $n-1$ の値が8時間のときのみ通る。

(26) 正解 D

I、II、IIIの情報より、4位の枚数を x 枚と置くと、それぞれの枚数は、1位→ $4x$ (枚)、2位→ $3x$ (枚)、3位→ $2x$ (枚) と表せる。

ア IVの情報より、PとQの順位は (P, Q) = (1位, 3位) (3位, 1位) (3位, 4位) (4位, 3位) のいずれかなので、必ずしも誤りとはいえない。

イ IVの情報より、(PとQ) の順位は 1位, 3位, 4位のいずれかなので、必ずしも誤りとはいえない。

ウ IVの情報より、いずれの場合も PかQのどちらかが3位に入るので、Sは3位になり得ず、誤り。

(27) 正解 D

カからクまでの情報をあてはめる。

カ $Q \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ と $R \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow Q$ の2通りが考えられるので決まらない。

キ $P \rightarrow S \rightarrow Q \rightarrow R$ 、 $Q \rightarrow R \rightarrow P \rightarrow S$ などが考えられるので決まらない。

ク $P \rightarrow S \rightarrow Q \rightarrow R$ 、 $Q \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ などが考えられるので決まらない。

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ カで2通りに絞られ、キで $Q \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ に決まる。

カとク $R \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow Q$ 、 $Q \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ の2通りが考えられるので決まらない。

キとク $P \rightarrow S \rightarrow Q \rightarrow R$ 、 $Q \rightarrow S \rightarrow P \rightarrow R$ の2通りが考えられるので決まらない。

検査 I 言語能力適性検査

解答・解説

▶本文
136～149ページ

(1) 正解 C

空所の直前の「その」という指示語に注目する。この指示語は、その前にある「飛んでいるよう」「踊っているよう」「舞っているよう」を指すので、空所にはそれらの様子を表す語句が入ると推測できる。したがって、滑稽な、おどけたさまを表す「コミカル」が適切である。

(2) 正解 E

空所直後の文に、「北海道で冬季、野菜などを貯蔵する小屋「岡室」よりも簡素なつくりだ」とあることから、Eの「掘っ立て小屋」が正答。掘っ立て小屋とは、土台を置かず地面を直に掘って柱を立てて作った小屋のこと。

(3) 正解 B

「静止している物体に対して運動する」「絶対的な意味に於ては、許されない」という表現から、「相対的」が適切である。「相対」とは、ほかとの関係によって成り立つことをいう。

(4) 正解 D

町や村というのは普通名詞であるため、「単に」のあとの①は「普通」が適切である。また、「一方を某町といい一方を某村という」という表現から、「町や村が地名の一部となっている」ことがわかる。したがって、②は「固有」が適切である。

(5) 正解 B

①には直後の「操作的」と同列で扱える語句が入ると推測できる。技術と科学の関係が述べられていることから、①は「技術」が適切。②は直後の「の発達」につながる語句が入る。望遠鏡や顕微鏡の発明によって発達することから、「科学」が適切である。

(6) 正解 E

空所の前後から、「シニシズム」と「虚偽意識」が同格で扱われていることに注目する。また、3行目に「そんなこと嘘だとわかっているけれども、……」という例が述べられており、「わかっている」という表現から「自覚した」態度であると推測できる。したがって、Eが適切である。シニシズムについては、1行目で「メタ的な視点にたったイデオロギー」と述べられているので、「排他的に認識した」「批判した」という表現のあるBとCは適切ではない。

(7) 正解 D

空所には「遺伝の機構」を示すような語が入る。また、空所を含む文の末尾にある北原白秋の「薔薇の木に薔薇の花咲く、なにごとのふしぎなけれど」から、Dの「カエルの子はカエル」が正解となる。

(8) 正解 C

選択肢が「工藝」と「美術」の組み合わせであることを確認し、問題文を見る。(中略)後に、「美は実用から遊離したものなる故に讃美された」と述べられている点をふまえ①を見ると、「美の標準」とは「実用から遊離したもの」であると考えられる。したがって、「工藝」は実用と関係が深いものであるから、①には「美術」が入る。②は、①と異なるものが入るので「工藝」。③は、美学について述べた内容であるため、「美術」が入る。

(9) 正解 E

「海域の火山と地球内部を統合的に理解する調査研究を推進」し、「火山活動の理解を目指している」理由は、「海域の未知の火山が不意打ちで噴火すると、災害が大きくなる懸念がある」からであり、Eが適切。

(10) 正解 C

企業の生産性向上や様々な社会課題を解決するためにデジタル技術を活用することが国際的にも広がっている現状があり、日本でも、各学校や企業での導入が進んでいる。

(11) 正解 D

下線部分の直前の「衝突や」の「や」という語から、「衝突」と並列で用いられていると推測できる。また、直後の「平和的解決」という語句から、「解決すべき問題」と考えると、「紛争」が適切である。ちなみに、「紛争」の「紛」を「粉」と間違えないように注意。

(12) 正解 F

11行目の「協調」の語句のあと、「そこにあるのは」という表現で文が始まっている。ここから、「そこが指しているもの」が「協調」であると推測する。

ア 「そこ」の直後で「人は一人では生きられない」と述べられているので、適切ではない。

イ 11行目の「協調」の直前に、「二つの問題解決法の中間に位置する」と述べられている。「二つ」とは、アメリカ人に多い「自己主張」と、東洋人に多い「妥協」や「譲歩」という考え方といえるので、適切である。

ウ 「そこ」の直後で「周りの人や環境により生かされ」と述べられているので、適切である。

(13) 正解 B

各選択肢の語の意味は、次のとおり。「まず」は「最初に」や「とにかく」という意味。「もともと」は、名詞、形容動詞、副詞などで用いられ、「はじめから」「元来」という意味。「いずれ」は「どちらにしても」、「これまで」は「この時点に至るまで」、「あげくのはてに」は「あげく」を強めた言い方で「最後の最後には」という意味。空所の前文では、「協調的交渉術」とは「コミュニケーション・スキル・トレーニング・プログラム」であることが述べられ、空所の直後では、そのプログラムを開発した経緯が述べられている。これらから、「協調的交渉術」とは、その始まりが「一人のアメリカ人女性の教育専門家が開発したもの」だという文脈が明らかになるので、Bの「もともと」が解答になる。

(14) 正解 C

下線部分の直前に「人は一人では生きられない」「周りの人や環境により生かされ」といった表現があり、それに関連した意味であると推測できる。「持ちつ持たれつ」は、互いに助けたり助けられたりすること。同じ意味の語句としては「困ったときはお互いさま」が適切である。「気脈を通じる」は、目的のためにひそかに互いの気持ちや考えを通じ合わせることをいう。

(15) 正解 A

下線部分の前の段落から、「自己主張」と「妥協」や「譲歩」の関係、「対立」や「衝突」についての研究結果を読み取り、どのような理由で「協調」を目指すようになったのかを考える。

ア 17行目に「『優れた交渉者は協調的交渉に長けている』ことが次第に明らかになってきた」と述べられており、これが「気づいた」理由と考えられるので、適切である。

イ 14行目に「『優れた交渉者は精神的にもタフである』……の迷信」と述べられている。しかし、下線部分の直後に「自分たちの伝統的な問題解決方法の中に……取り入れる」という表現があり、「タフである必要はない」と述べているわけではないので、適切ではない。

ウ 「優れた交渉者は妥協案を多く持っている」ということは述べられていないので、適切ではない。

(16) 正解 E

空所の直前に「つまり」という接続詞があり、直前の表現を言い換えたものが入ると推測できる。「つまり」の前に「自分たちの伝統的な問題解決方法の中に東洋的な問題解決方法を取り入れることで、お互いを認め、尊ぶ」という表現があり、これを「②」を大事にしながら歩み寄る」と言い換えている。「取り入れる」という語句に注目し、10行目で「二つの問題解決方法の中間に位置する『協調』を目指している」と述べられているので、空所の部分が伝統的な問題解決方法、歩み寄るの部分が東洋的な問題解決方法に相当すると考えられる。したがって、「それぞれの「個」」を入れるのが適切である。「対立」や「衝突」は伝統的な問題解決方法として持ち出されているものではないので、適切ではない。

(17) 正解 A

「唐様（からよう）」には、「中国風である」という意味のほか、「中国風の書体や書法」という意味もあり、とくに江戸時代に流行した元風や明風の書体のことを「唐様」という。ことわざでは後者の意味で用いられており、「中国風のしゃれた書体」が適切である。

(18) 正解 C

下線部分の前後で、ことわざについて述べられている部分を探す。ことわざについての説明は第2段落以降にある。

- ア 7行目に「ことわざを幼稚、通俗な思考のように考えがち」と述べられているが、「(微妙な心理を) ひと言でいってのけるのがことわざ」と述べられており、幼稚や通俗な思考だけにはとどまらないものと推測できる。
- イ 文中では、ことわざの意味が変化しても辞書に載り、人々に使われることを「生命力」としており、正確な使い方が残っていくことを表しているわけではないので、適切ではない。
- ウ 下線部分の直後に「おおよそあてはまれば、使うことができる」と述べられており、それ以降でことわざの意味が変化する例が持ち出されている。33行目に「国語辞書もこれを許容、一説として承認」と述べられており、意味の変化が許容される性質を持つと考えられるので、適切である。

(19) 正解 A

「ことわざ学」という語句は最終行に登場する。それまでの文脈で、ことわざの意味が国や時代などによって変化する例を挙げながら、わかったような気にさせる「ことわざの妙」が説明されている。最終行の直前では「こういうことはほかにも例があって」とし、「ことわざ学」ができなくてはならないという考えが述べられている。筆者のこの考えを踏まえると、「ことわざ学」とは、世界各国にあることわざのさまざまな意味や使われ方、用例の相違などを比較し、ことわざの位置付けを図ることと推測できる。したがって、アが適切である。

- イ 「通俗性」に着目しているわけではなく、風俗との関連性を調べるとも述べられていないので、適切ではない。
- ウ 「柔軟性」については文中で読み取れるが、ことわざを利用して国や時代の変遷を探るという内容ではないので、適切ではない。

(20) 正解 D

ことわざについては文中全体を通して述べられているので、選択肢を見て、それが述べられている箇所を読み返す。

- ア 9行目に「この微妙な心理をうまく解明できない」という表現があり、直後に「それをひと言でいってのけるのがことわざである」と述べられている。「この」が指すのは「となりの花は赤い」のことわざであり、ことわざなら微妙な心理をひと言で表せると評価していると考えられる。
- イ 34行目に「ことわざの生命力」という表現がある。それまでの文脈で、ことわざの意味が国や時代などによって変化する例を挙げ、それが辞書でも許容されるなど、ことわざが広く受け入れられていることが述べられており、それを「ことわざの生命力」と捉えていると考えられる。
- ウ 「社会心理学」は12行目、「ことわざ学」は最終行にある。「ことわざ学ができなくてはならない」とは述べられているが、文学や社会心理学の研究が求められるとは述べられていない。

(21) 正解 D

選択肢を直訳すれば、おおよその予想がつく。

- A 「私を愛するなら私の犬も愛しなさい」→「屋烏（おくう）の愛」
B 「寝ている犬はそのままにしておけ」→「触らぬ神に祟りなし」
C 「老犬には新しい芸を仕込めない」→「芸は若いうちに学べ」
D 「走り回る犬は骨を見つける」→「イヌも歩けば棒に当たる」
E 「吠える犬ほど噛みつかない」→「弱い犬ほどよく吠える」

(22) 正解 B

選択肢の記述が文中のどこで述べられているかを探す。

- ア 3行目に「もっとも進んだメディアであるテレビが……」とあり、「ことわざ、ことわざのひねりに興味、関心をもっている」と述べられている。「非科学的で通俗なもの」とは述べられていないので、適切ではない。
- イ 文中ではことわざの意味が国や時代などによって変化する例を挙げ、34行目で「ことわざの生命力」を評価している。また、12行目に「教訓ではない。社会心理学でもない。……洞察である」という表現があり、教訓でも学問でも解明できない洞察があると述べられているので、適切である。
- ウ ことわざについては、10行目の「ひと言でいってのける」、14行目の「その意味をつくさないでも、わかったような気がする」などの表現があるが、「普遍的な意味がこめられている」とは述べられていない。また、国や時代によって解釈が異なる不思議さを説明した内容でもないので、適切ではない。

(23) 正解 D

空所は2行目と19行目に2箇所ある。2行目では、直前の「昔話が□伝えで継承されてきた」と、直後の「『語り、聞く』という伝達方法によってつくりあげられてきた」の関係に注目する。19行目では、前文の「『ここではありませんよ』ということ」と、直後の「お話＝空想の世界ですよ、ということ」の関係に注目する。いずれも前文を後文で言い換えていると判断できるので、換言の接続詞である「つまり」が適切である。

(24) 正解 C

「勸善」は「善を」「勧める」という動詞と目的語の関係になっている。したがって、「陸を」「離れる」の「離陸」が適切である。「作者」は「作る」「者」という前の語が後ろの名詞を修飾する関係、「獲得」と「満足」は類似の意味を持つ語の組み合わせ、「多用」は「多く」「用いる」という前の語が後ろの動詞を修飾する関係である。

(25) 正解 D

挿入文は「これは」＝「強力なおまじない」という文であり、何が強力なおまじないかを考え、「これは」が指す内容を探す。挿入文の「空想の世界に引き込む」という表現から、「空想」について述べられている段落が適切と推測できる。「強力なおまじない」とは、昔話のはじまりのことばが子どもたちに「空想の世界」であることを刷り込む効果があることを指していると考えられるので、工の第4段落が適切である。同様の表現として、17行目に「これが実は絶大な力をもっています」とあることから、この段落と関係が深いことがわかる。

(26) 正解 A

選択肢はすべて「心」に関連する語句であるが、「あまりに優れていて憎らしいほどだ」という意味を持つ語句は「心憎い」である。「心もとない」は頼りなく不安なこと。「心苦しい」は相手に申し訳なく思うこと。「心置きない」は「心置きなく」として使うのが自然であり、遠慮なく、安心してという意味。「心ない」は他人に対する思いやりがないこと。

(27) 正解 E

「二つの決まり文句」とは何かを考える。「決まり文句」に注目すると、14行目に「はじまりと結びの決まり文句」という表現があり、それ以降で「はじまり」と「結び」について具体的な説明がされている。

- ア 32行目に「幸せな結末に対する満足感とともに、……戻してくれます」と述べられており、「結び」についての説明なので、適切である。
- イ 6行目に「無数の人々の口と耳をくぐりぬけて生きのびてきた」と述べられているが、表現様式の内容であって解釈については触れられていない。
- ウ 16行目以降で「はじまり」についての説明がされており、「むかしむかし」が「今ではない」、「あるところに」が「ここではない」と述べられているので、適切である。

(28) 正解 A

選択肢の記述が文中のどこで述べられているかを探す。

- ア 表現様式については第3段落で説明されており、「はじまりと結びの決まり文句」「くりかえしの多用」「先取りの様式」などの形式があることが述べられている。また、第4段落で昔話の「はじまり」が空想の世界へと引き込むものであること、最終段落で「心を開放することのできる物語空間」であることも述べられているので、適切である。
- イ 第2段落では、昔話の表現様式の獲得について、「語り手も、聞き手も、文学的才能に恵まれた人も、そうでない人もすべて」が貢献したと述べられているので、適切ではない。
- ウ 第3段落では、「リュティがとりあげていない面から、少しふれておきましょう」と述べられており、それが第4段落以降の「はじまり」と「結び」の文句の説明へと続くので、適切ではない。

検査Ⅱ 非言語能力適性検査 解答・解説

▶ 本文
150～162ページ

(1) 正解 D

東京都と大阪府のCの店舗数をそれぞれ計算し、差を求める。

東京都の店舗数は7000で、Cの構成比は22.0%なので、

東京都のCの店舗数は $7000 \times 0.22 = 1540$ 。

同様に、大阪府の店舗数は4000で、Cの構成比は27.5%なので、

大阪府のCの店舗数は $4000 \times 0.275 = 1100$ 。

したがって、その差は $1540 - 1100 = 440$ 。

(2) 正解 E

北海道のAの店舗数を求め、福岡県の店舗数を計算する。

北海道の店舗数は3000で、Aの構成比は30.0%なので、

北海道のAの店舗数は $3000 \times 0.3 = 900$ 。

福岡県の店舗数を x と置くと、Aの構成比は45.0%で、

北海道と福岡県のAの店舗数は等しくなるので、 $x \times 0.45 = 900$ 。

これを解くと、 $x = 2000$ 。

(3) 正解 D

東京都のAの店舗数を求め、全国合計の店舗数に占める割合を計算する。

東京都の店舗数は7000で、Aの構成比は38.0%なので、

東京都のAの店舗数は $7000 \times 0.38 = 2660$ 。

全国合計の店舗数は55000なので、

東京都のAの店舗数 ÷ 全国合計の店舗数 = $2660 \div 55000 = 0.0483\dots$ 。

百分率にして、4.8 (%)。

(4) 正解 B

全国合計の店舗数は55000で、Bの構成比は32.0%なので、

全国合計のBの店舗数は $55000 \times 0.32 = 17600$ 。

このうちの1.25%が広島県のBの店舗数なので、 $17600 \times 0.0125 = 220$ 。

割合を計算すると、 $220 \div 55000 = 0.004$ 。

百分率にして、0.4 (%)。

(5) 正解 B

各推論の「○が正しければ△」を「○ならば△」と読み換えて検証する。

ア 「XはZに負けた」ならば「Yは1回目より順位を下げた」

XがZに負けても、Z→Y→XやY→Z→Xという順位があり得るので、Yは1回目と順位が同じか順位を上げる可能性がある。

したがって、正しいとは限らない。

イ 「Yは1回目より順位を下げた」ならば「Zは1回目より順位を上げた」

Yが1回目より順位を下げると3位。このとき、Zは1位か2位になるので、正しい。

ウ 「Zは1回目より順位を上げた」ならば「XはZに負けた」

Zが1回目より順位を上げると1位か2位。このとき、X→Z→Yという順位があり得るので、正しいとは限らない。

(6) 正解 C

カ 「Yは1回目より順位を下げた」ならば「XはZに負けた」

Yが1回目より順位を下げると3位。このとき、X→Z→Yという順位があり得るので、正しいとは限らない。

キ 「Zは1回目より順位を上げた」ならば「Yは1回目より順位を下げた」

Zが1回目より順位を上げると1位か2位。このとき、Z→Y→XやY→Z→Xという順位があり得るので、正しいとは限らない。

ク 「XはZに負けた」ならば「Zは1回目より順位を上げた」

XがZに負けると、Zは1位か2位。1回目の結果ではZは3位だったので、正しい。

(7) 正解 C

問われているのは運転免許か自動車のいずれか一方だけを持っている男性なので、**男性についての表を作成する。**

運転免許か自動車のいずれか一方だけを持っているのは、色のマスであり、 $4 + 21 = 25$ (人)。

		自動車		計
		○	×	
運転免許	○	27	21	48
	×	4		12
計		31	29	

(8) 正解 B

問われているのは運転免許を持っておらず、自動車を持っている女性なので、**女性についての表を作成する。**

運転免許を持っておらず、自動車を持っているのは、色のマスであり、 4 (人)。

		自動車		計
		○	×	
運転免許	○	11	13	24
	×	4		16
計		15	25	

(9) 正解 G

(7) と (8) の表より、運転免許を持っていて、自動車を持っていない (**運転免許○・自動車×**) 男性と女性のそれぞれの人数を足せばよい。

男性は21人、女性は13人なので、 $21 + 13 = 34$ (人)。

(10) 正解 H

Ⅱを表にまとめると、勝ち○、負け×、引き分け△として、次のようになる。

1	2	3	4	5	6
			×		

さらに、ⅠとⅢの情報を加えると、次の2パターンが考えられる。空欄には△または×が入る。

	1	2	3	4	5	6
パターン①	○		○	×	○	
パターン②	○		○		△	○

- ア いずれのパターンでも2試合目は勝っていない。よって、**誤り**。
- イ パターン①の2試合目、6試合目はそれぞれ負けである可能性がある。パターン②の5試合目は、連続した結果が続かないため、引き分けとなる。よって、**どちらともいえない**。

(11) 正解 E

(10)でまとめた表とⅣより、次の3パターンが考えられる。

	1	2	3	4	5	6
パターン①-1						×
パターン①-2	○	△	○	×	○	△
パターン②-1					△	○

- カ パターン①-1は2敗、パターン①-2、②-1は1敗となる。1敗と2敗の両方のパターンが存在する。よって、**どちらともいえない**。
- キ パターン①-1、2にはあてはまらないが、パターン②-1では4、5試合目があてはまる。よって、**どちらともいえない**。

(12) 正解 F

6枚のカードの和は21なので、Ⅱより、Xの和は11以上、Yの和は10以下でなければならない。

ア Xの和が11となるのは(1,4,6)、(2,3,6)、(2,4,5)

Xの和が12となるのは(2,4,6)、(3,4,5)

いずれもⅠを満たすパターンがある。よって、必ず11であるとはいえず、どちらともいえない。

イ Yが最小となるのは(1,2,5)のときで、和は8となる。

よって、Yのカードの和は7にはならず、誤り。

別解 Yのカードの和が7になるのは(1,2,4)のときのみである。このときXのカードは(3,5,6)となりⅠを満たさない。よってYのカードの和は7にはならない。

(13) 正解 D

Xの持っているカードの組み合わせとして考えられるのは

(1,4,6)、(2,3,6)、(2,4,5)、(2,4,6)、(3,4,5)、(3,4,6)

カ (2,3,6)、(2,4,5)、(2,4,6)があり、決まらない。

キ (2,3,6)、(3,4,5)、(3,4,6)があり、決まらない。

ク (1,4,6)、(2,4,5)、(2,4,6)、(3,4,5)、(3,4,6)があり、決まらない。

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ (2,3,6)に決まる。

カとク (2,4,5)と(2,4,6)があり、決まらない。

キとク (3,4,5)と(3,4,6)があり、決まらない。

(14) 正解 B

図より、一次80点以上、かつ二次60点以上であれば、級認定がなされることがわかる。これを踏まえ、問題文のそれぞれの判定方法を検証する。

- ア 最低でも一次80点、二次60点が必要であり、合計140点が合格最低点となるので、正しい。①のみでは140点が最低点かわからない。
- イ 一次70点、二次100点の場合、一次は合格基準を満たしていないので、級認定はなされない。したがって、必ずしも正しいとはいえない。
- ウ 平均が90点の場合、いずれか一方が100点のとき、他方は80点となる。一次、二次の点数は必ず80点以上になり、級認定の条件を満たすので、正しい。

(15) 正解 B

Xの前の段階で、 $x + y \geq 140 \rightarrow \text{Yes}$ 、 $a + b = 2 \rightarrow \text{No}$ と判定されている。

そのため、Xを通る経路では、一次と二次の合計点が140点以上、かつ一次または二次のいずれか一方の合格基準を満たしていない状態となる。

したがって、Xは一次(a)と二次(b)のいずれが合格基準(=1)を満たしているかで分岐させる条件式になればよい。

Xでは、Yesで一次合格、Noで二次合格なので、 $a = 1$ となる。

(16) 正解 H

カからコまでの情報をあてはめる。

- カ 一次、二次とも合格基準を満たしているので、級認定がなされる。
- キ 一次、二次とも合格基準を満たしていないので、不合格。
- ク 合計点が140点未満で、二次のみ合格基準を満たしているので、二次合格と判定される。
- ケ 合計点が140点以上で、一次のみ合格基準を満たしているので、一次合格と判定される。
- コ 合計点が140点以上で、二次のみ合格基準を満たしているので、二次合格と判定される。
- したがって、同じ判定になる組合せはクとコ。

(17) 正解 F

セミナーの参加者数は合計9人で、Ⅱの情報より営業部>経理部。

これらをもとに各推論を検証する。

- ア 参加者数は合計9人なので、営業部が7人のとき、経理部と技術部がそれぞれ1人ずつとなり、Ⅲの情報に反する。したがって、誤り。
- イ 営業部>経理部なので、営業部：経理部：技術部=4：3：2のパターンがあり得る。したがって、必ずしも誤りとはいえない。
- ウ 営業部>経理部なので、営業部：経理部：技術部=3：2：4のパターンがあり得る。したがって、必ずしも誤りとはいえない。

(18) 正解 E

セミナーの参加者数は合計9人で、ⅡとⅣの情報より営業部・技術部>経理部。

これらをもとに各推論を検証する。

- カ 営業部と技術部の差が4人のとき、営業部：経理部：技術部=2：1：6のパターンがあり得る。したがって、必ずしも誤りとはいえない。
- キ 経理部が3人のとき、営業部と技術部は4人以上になり、参加者数の合計9人を超えてしまう。したがって、誤り。
- ク 営業部：経理部：技術部=5：1：3のパターンがあり得る。したがって、必ずしも誤りとはいえない。

(19) 正解 F

場合分けすると表の6通り。これにサからスまでの情報をあてはめる。

- サ 営業部>技術部>経理部
①、②、③があり、決まらない。
- シ 経理部=1
①、②、④、⑥があり、決まらない。
- ス 技術部-経理部=1
①、③があり、決まらない。

	営業部	経理部	技術部
①	6	1	2
②	5	1	3
③	4	2	3
④	3	1	5
⑤	3	2	4
⑥	2	1	6

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

サとシ ①、②があり、決まらない。

サとス ①、③があり、決まらない。

シとス ①のみに決まる。

(20) 正解 D

問われているのは、電子マネーPは利用していないが、電子マネーQを利用している人なので、PとQについての表を作成する。問われているのは色のマスであり、両方を利用している人は28(人)より、 $64 - 28 = 36$ (人)。

		Q		計
		○	×	
P	○	28	51	79
	×	36	35	71
計		64	86	150

(21) 正解 H

問われているのは、電子マネーPと電子マネーRのどちらも利用していない人なので、PとRについての表を作成する。問われているのは色のマスであり、 $97 - 60 = 37$ (人)。

		R		計
		○	×	
P	○	19	60	79
	×		97 - 60 = 37	
計		53	97	150

(22) 正解 I

問われているのは、電子マネーRは利用していないが、電子マネーQを利用している人なので、QとRについての表を作成する。

両方を利用している人を x (人)と置くと、電子マネーQのみを利用している人数は $64 - x$ (人)、電子マネーRのみを利用している人数は $53 - x$ (人)となる。

		R		計
		○	×	
Q	○	x	$64 - x$	64
	×	$53 - x$		86
計		53	97	150

		R		計
		○	×	
Q	○	27	37	64
	×	26	60	86
計		53	97	150

両方を利用している人は、いずれか一方を

利用している人の $\frac{3}{7}$ 倍なので、

$$\{(53-x) + (64-x)\} \times \frac{3}{7} = x \text{となる。}$$

これを解くと、

$$(117-2x) \times \frac{3}{7} = x$$

$$117-2x = x \times \frac{7}{3}$$

$$13x = 351$$

$$x = 27 \text{ (人)}$$

問われているのは色のマスなので、 $64 - 27 = 37$ (人)。

(23) 正解 E

社員は24人なので、 $A+B+C+D=24$ 。

Iの情報よりAとBで2倍か半分、IIの情報よりCとDで2倍か半分。

合計が24で、一方が他方の2倍となる関係が2組ある組合せを考えると、

(1, 2, 7, 14) (2, 4, 6, 12) (3, 6, 5, 10) の3通り。

これらをもとに各推論を検証する。

ア Bが2番目になるのはBが6か7のときで、必ずしも誤りとはいえない。

イ 4倍の関係になるものは上記の組合せに存在しないので、誤り。

ウ 差が7となる組合せは(7, 14)があり、必ずしも誤りとはいえない。

(24) 正解 E

カからクまでの情報をあてはめる。

カ Bが最多になるのは、Bが10、12、14のいずれかのときである。Bに合わせ、Aが5、6、7のいずれかとなるが、CとDの関係はわからない。

キ AとCの差が2となる組合せには、(4, 6) (3, 5)があり、どちらの組合せになるか、どちらがAとCになるかは決まらない。

ク $D > A$ となる組合せは、(1, 7) (2, 7) など、さまざまなものがある。

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ Bが最多、かつAとCの差が2のとき、 $B \rightarrow A \rightarrow C$ の順に考えると、

(B, A, C, D) = (12, 6, 4, 2) (10, 5, 3, 6) の2通りがある。

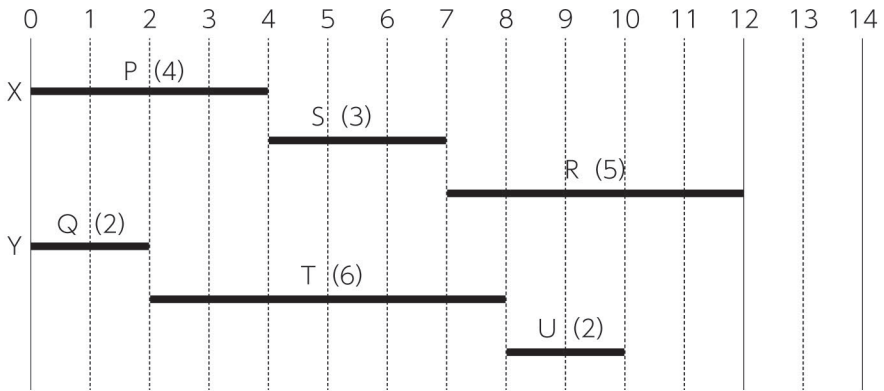
カとク Bが最多、かつ $D > A$ のとき、 $B \rightarrow A \rightarrow D$ の順に考えると
 $(B, A, D, C) = (10, 5, 6, 3)$ の1つに決まる。

キとク AとCの差が2、かつ $D > A$ のとき、 $A \rightarrow C \rightarrow D$ の順に考えると、
 $(A, C, D, B) = (4, 6, 12, 2) (3, 5, 10, 6) (5, 3, 6, 10)$
 の3通りがある。

(25) 正解 C

問題文より、XがPとS、YがQとTを行うことになる。

条件を整理すると、次のような図になる。



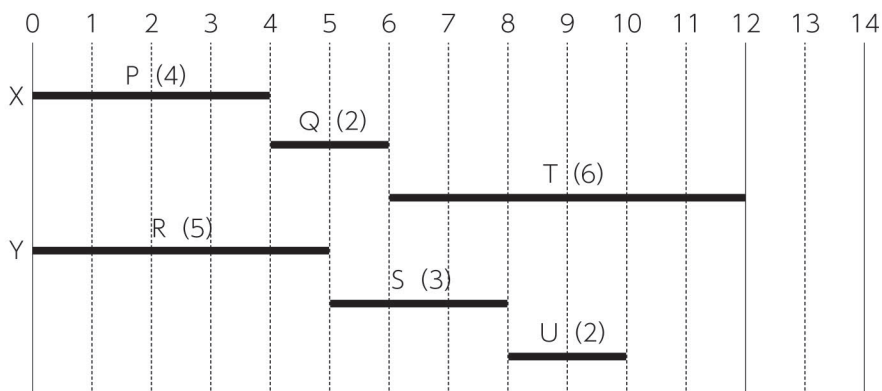
上図より、PとSを終了するのに7分、QとTを終了するのに8分かかるので、
 1分早いXにRを、YにUを割り当てると最短で終了する。

したがって、 $P + S + R = 4 + 3 + 5 = 12$ (分)。

(26) 正解 A

問題文より、XがPとQ、YがRを行うことになる。

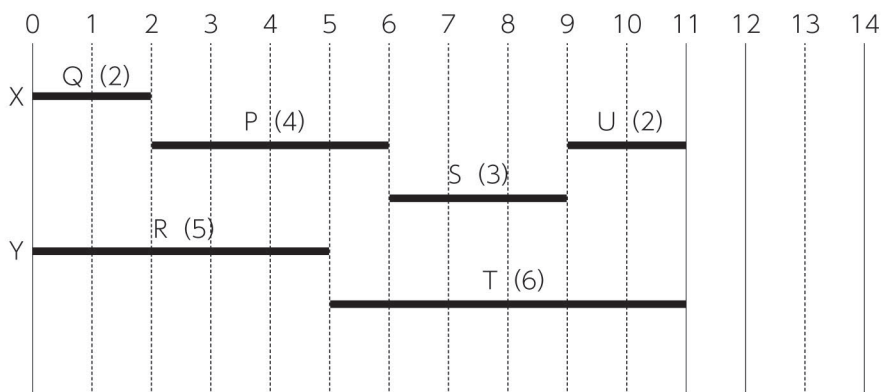
条件を整理すると、次のような図になる。



最短で作業を終了するために、Xの行うPとQの作業の順番を考える。

上図よりP→Qでは12分かかるが、下図のようにQ→Pでは11分となる。

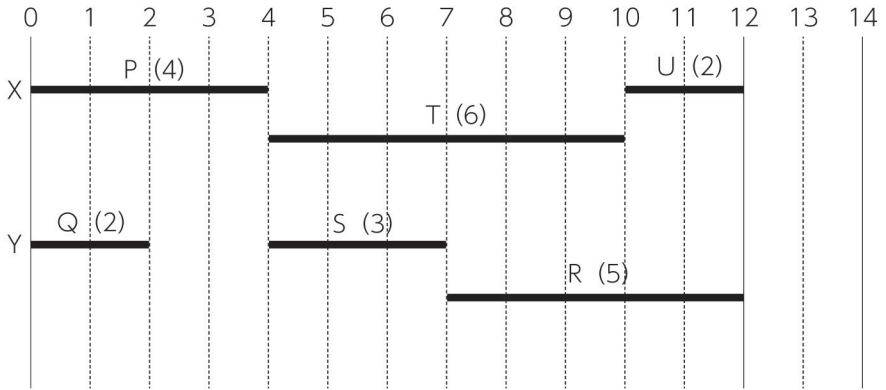
したがって、XにSとUを、YにTを割り当てると最短で終了する。



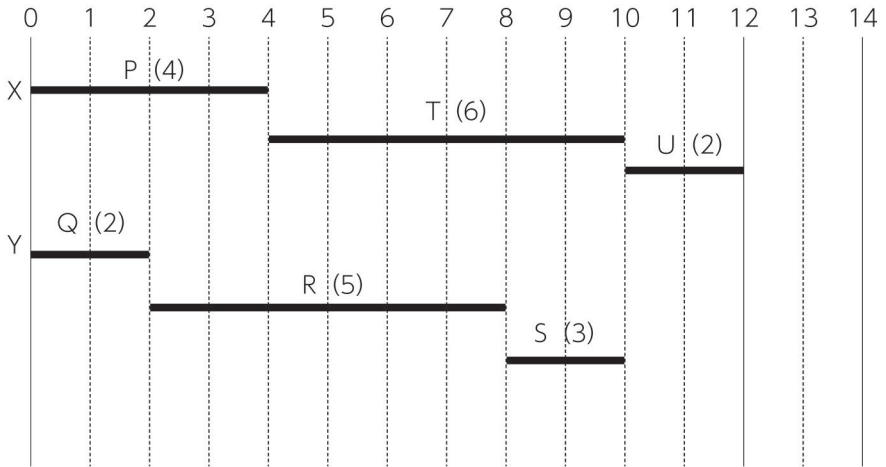
(27) 正解 B

問題文より、XがPとT、YがQとSを行うことになる。

条件を整理すると、次のような図になる。



もしくは



このとき、Qが2分遅れても全体の終了時間に影響を与えないことがわかる。選択肢は、2分よりも短い1分で与えられているが、惑わされないように注意。

検査 I 言語能力適性検査 解答・解説

▶ 本文
164～179ページ

(1) 正解 B

「必然」は決定的な原因により、必ずそうなると決まっていることであり、同意関係にあるのは「必定」。「偶然」は反対の意味を持つ反意語である。「蓋然（がいぜん）」はたぶんそうなると考えられること。

(2) 正解 E

「専心」はあることに心を集中することであり、同意関係にあるのは「没頭」。「傾向」は大勢や態度が特定の方向に傾くことであり、「傾」や「向」の漢字があっても心を向けることではない。

(3) 正解 C

「貢献」は何かのために力を尽くして役立つことであり、同意関係にあるのは「寄与」。「天与（てんよ）」は天が与えるもの、「賦与（ふよ）」は配り与えることであり、同意関係にはない。

(4) 正解 C

「懐（なつ）く」は子どもや動物が警戒心を抱かずに他者に慣れ親しむことであり、同意関係にあるのは「馴（な）れる」。「纏（まつ）わる」はからみつく、つきまとうこと。

(5) 正解 B

最初に提示された2語の関係を把握し、同じ関係にあるものを選択肢から選ぶ。「しょうゆ」は「調味料」の一種であり、「左が右に含まれる」という包含関係にある。「いす」は「家具」の一種。「休息」のために使われたり、「公園」に設置されていたりするが、ここでの関係とは異なる。

(6) 正解 A

「鉛筆」と「消しゴム」は筆記用具であり、「左と右がセットで使われる」関係にある。「糸」と「針」は裁縫用具であり、セットで使われる。「裁縫」や「仮縫い」は糸を使う用途、「服」は糸を使って作られるもののひとつであり、この関係とは異なる。

(7) 正解 A

「希少」は珍しくて少ししかないこと、「稀有（けう）」はめったにない珍しいことであり、「左と右が似た意味を持つ」という同義の関係にある。「任意」はその人の意思に任せることであり、「似た意味を持つのは「随意」である。「強制」は反対の意味を持つ対義の関係である。

(8) 正解 E

「コート」は「防寒」のために使われるものであり、「左が右の用途で使われる」という用途関係にある。「そろばん」は「計算」のために使われる。「算数」は「計算」より広義に用いられ、「そろばん」の用途としては適切ではない。

(9) 正解 B

情が厚く誠実なことは「篤実（とくじつ）」。「篤」には心がこもっている、あついという意味がある。「篤学（とくがく）」は学問に熱心なこと。「情実」は個人的な感情や関係がからんで公平さを保てない状態。

(10) 正解 E

一部が崩れるとほかも次々と崩れることは「瓦解（がかい）」。「瓦解」は屋根の瓦の一部が落ちると、ほかの瓦も次々と落ちることに由来する。「崩壊」や「破壊」の「壊」の漢字から「崩れる」と関連付けてしまいやすいが、単に「崩れること」を問っているわけではない。

(11) 正解 C

興醒めした顔をするのは「鼻白む」。「鼻高々」は得意になっている様子。「目鼻をつける」は物事の見通しをつけること。「目を白黒させる」は驚いてまごつく様子。「愁眉（しゅうび）を開く」は心配ごとがなくなって安心すること。

(12) 正解 C

ものが十分にあることは「潤沢(じゆんたく)」。「余分」は余ったものや残ったもののことで、「十分にある」結果ともいえるが、「十分にある」という状態を意味する語ではない。

(13) 正解 A

動作などが静かに行われるさまは「しずしず」。「がやがや」や「わいわい」は音がある状況に用いる。「ぼつぼつ」は物事がゆっくりと進行する様子に用いるが、「ぼつぼつ」には音が伴う場合もあり、「しずしず」とは異なる。

(14) 正解 C

いずれの選択肢にも「任」の漢字があるので、ほかの漢字に「おもむく」の意味があるものを探す。任地におもむくことは「赴任(ふにん)」。「赴」は「おもむく」と読み、ある場所や状態に向かうこと。

(15) 正解 E

真実と偽りは「真偽」。漢字で判断できる。「信疑」は信じることと疑うこと。「虚偽」は嘘と偽り。「真義」は本当の意義のこと。

(16) 正解 A

得意になっている様子は「有頂天(うちょうてん)」。「最高潮」は物事の緊張や精神の高揚が最も高まった状態のこと。「最高潮」に持続性はないが、「有頂天」は得意になっている様子が持続する感じを伴う。

(17) 正解 A

思わず笑いがこみ上げてくるような上品なおかしさは「ユーモア」。「ウィット」も「エスプリ」も「機知」という意味で、日本語の感覚としては「とんち」に近い。また、「エスプリ」はフランス人特有の機知という意味で用いられることが多い。

(18) 正解 E

目をみはることは「瞠目（どうもく）」。驚いたり感心したりしたときに用いる。「刮目（かつもく）」は注意して見ること。「瞑目（めいもく）」は目を閉じること。安らかに死ぬことも表す。

(19) 正解 B

正しいとされてきた考え方や決定を根本から変えるのは「覆（くつがえ）す」。「ひっくり返す」は具体的なものの上下や裏表を逆にするという意味がある。「翻（ひるがえ）す」は対象が自分の主張であるときに用いるが、「覆す」は対象が自分に責任のないものに対して用いる。

(20) 正解 A

いずれの選択肢にも「観（見る）」の漢字があるので、「目先のことにこだわらない」「物事を見通す」といった意味を持つものを探す。目先のことにこだわらず、物事の道理を見通すことは「達観（たっかん）」。「諦観（ていかん）」は本質をはっきりと見極めることであり、「見通す」といった意味はない。

(21) 正解 B

語句補充の問題は、空所の前後をよく読むことが正解を導く手がかりとなる。この場合は、文の冒頭に空所があるので、空所に続く文に注目する。「安寧を脅かす黒雲のようなもの」「悪夢のような不安の陰影」という表現から推測すると、「不気味」が適切といえる。

(22) 正解 C

「年少」－ [①]、[②]－「偉大なる者」が対比の形になっていることを読み取る。空所③は、続く箇所に「いわば」があり、空所③を説明している点に注目し、老いてますます年少者らしくなっていると述べられているので、空所③には冒頭文にある「年少」に関する内容が入る。

(23) 正解 C

空所①を含む文が、「しかし」以降の文と対の形になっている点を読み取り、空所①が「変更」に対応することを踏まえ、空所①に入る語は「固定」が適切で

ある。空所②には、言葉が持つ変化を説明する語が入るが、その変化とは「常に」「絶えず」変化していくものと述べられているため、順々に変化する過程を示す「系統的」が入ると判断する。

(24) 正解 C

空所の直前が「並立」を表す「や」である点に注目する。「しぐさ」と同じ意味の語は、Cの「身振り」であるので、解答はCになる。Aの「服装」とBの「化粧」は「しぐさ」と並立の関係にならないので不適。Dの「酔態」は動作であるが、ひどく酒に酔った様子を表す語なので不適。Eの「握手」は「しぐさ」の一種であるので不適。

(25) 正解 A

空所が「AのようなB」の「B」の部分にある点に注目する。「あらゆる歴史論が歴史それみずからの中に転ずる」と同じように「リズムもまた～」という文脈であり、「転ずる」は、「移る・変わる」という意味であるので、空所にはAの「変容」が入る。

(26) 正解 F

空所①の直後に「国境をなくす」という表現があり、それと同等の表現が並列で用いられていると推測できるので、①には「ボーダレス化」を入れるのが適切である。また、空所②の直前に「当の異質性を消去する」という表現があり、異質性を消去することは「注意点」ではないから、②には「ニュアンス」を入れるのが適切である。

(27) 正解 B

「聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥」ということわざは「知らないことを聞く恥ずかしさはそのときだけのことで、知らないまま生涯を過ごすのはもっと恥ずかしいこと」という意味である。聞くことや知ることの大切さ、よく聞き、多く知ることの重要性を説いているのであって、見ることや語ることについては述べられていない。

(28) 正解 A

下線部分のあとの「、」が同格を表していることに注目する。つまり、下線部分には、「求めている言動を外さないように気を遣う」ことと同等の表現が並列で用いられていると推測できる。近い表現は「場の空気を読み取りつつ」である。

(29) 正解 D

下線部分の前の「講義も演習も」のたとえが下線部分のあとに述べられていると考えられるので、「たとえて言うならば」の意味の「いわば」が適している。

(30) 正解 A

下線部分のあとの「拍手なんかするのは……白々しい虚礼」という表現や、「黙っているのが本当の敬意だというような気がして」という表現に注目する。演説に感動したことが読み取れるので、「感動が大きければ大きいほど」が適切である。

(31) 正解 C

下線部直後の「そういうもの」が下線部内の内容であることを把握する。また、下線直後の「階級思想」「闘争的気分」、「人心を刺激するもの、「世相を陰しくすること」が「そういうもの」の具体例であることから、下線部は前向きな内容ではないことが推測される。したがって、「反動」という語があるCが解答になる。Aの「戦争」は、前向きな語ではないが、具体的に「戦争」を指しているわけではないので不適。

(32) 正解 B

下線部分のあとの文が「でも」という逆接の接続詞で始まっていることに注目する。「必ずしも左右対称でない」という表現があるので、多くの動物は左右対称と述べられていると推測できる。「左右が非対称なのが珍しい」も似た意味ではあるが、「必ずしも左右対称でない」の文につながらない。

(33) 正解 D

16行目の「春の山は、次第に生気に満ちてきて」や、18行目の「冬が終わり、眠ったような褐色の山が、産毛におおわれたように、少しずつ芽吹き、潤みを

帯びて」という表現から、「春の山」の特徴を捉える。「生気に満ちてきて」や「産毛におおわれた」に注目すると、下線部分は生命活動が活発になることを表す熟語であると推測される。したがって、「**胎動**」が適切である。

(34) 正解 C

4行目の「歳時記の世界では、山を擬人化して表現するのです」という表現から、擬人化した語句が入ると推測できる。18行目で冬の山を「眠ったような褐色の山」と表現していることから、「**眠る**」が適切である。

(35) 正解 B

文中下線部「いいならわし」は、「いいならわす」の連用形で「昔から慣習として言う」「癖のようにいつも言う」という意味であり、Aの「習慣」、Dの「慣習」は同義語になる。Bの「**革新**」は、「習慣」や「慣習」の対義語であるため、**B**が正答となる。

(36) 正解 B

ア、イ、ウに関連する説明は、第2段落から第3段落までにある。

ア 第2段落に「擬人化して表現する」とは述べられているが、「隠喩化」とは述べられていない。

イ 第3段落に「郭熙が、その画譜の中で、……このように描かなければいけない、といった」とあり、「歳時記の言葉にとり入れられた」と述べられている。続けて、「そこから、……季語が生まれました」と述べられている。

ウ 2行目に「春の山、と表現するのは他のジャンルと同じ」と述べられており、「山笑う」ではない。

(37) 正解 C

「冬の山」については、7行目の「冬山は惨淡として眠るが如し」、10行目の「冬の『山眠る』」、18行目の「眠ったような褐色の山」で触れられている。

ア 18行目の「眠ったような褐色の山」という表現から、枯れ木に覆われた状態を想像できるが、褐色の山になった原因には触れられていない。また、「眠ったような」という表現は、山に対するものであり、動物たちの「冬眠」ではない。

- イ 7行目の「惨淡として眠るが如し」、18行目の「眠ったような褐色の山」としか述べられておらず、「雪」については触れられていない。
- ウ 7行目、18行目のいずれの箇所でも、眠っているような状態であることが述べられている。

(38) 正解 B

- ア 正岡子規の句は13行目で触れられているが、「春の山」と詠むのと「山笑う」と詠むのとでは「ずい分感じがちがって」いることを示す例であり、句の解釈は述べられていない。
- イ 25行目に「のどかな村のどこかで、赤ん坊の聲がしている……そんな春の山を、うまくとらえていますね。山も笑い、妻子も笑う。そんなのんびりとした、平和な村の景が、よく伝わってきます」と述べられており、春の山だけではなく、平和な村の風景も伝わってくると述べられている。
- ウ 季語については、第3段落で「北宋の画家である郭熙」の影響により、山の季語が生まれたと述べられており、「諸外国の影響を受けず、日本独自のものとして発達してきた」とはいえないので、適切ではない。

(39) 正解 B

「八面」に続く四字熟語として成立するものは「六臂(ろっぴ)」。意味は、一人で何人分もの働きをすること、多方面でめざましい活躍をすること。そのほかの選択肢を含む四字熟語として、Aは「四面楚歌」、Cは「得意満面」、Dは「反面教師」、Eは「四角四面」。ちなみに「八面玲瓏(はちめんれいろう)」とは、どこを見ても透き通っていて曇りがない様子のこと。

(40) 正解 A

第1段落では富士山を八面玲瓏と述べており、下線部分の直前では「富士は世界に名高い山」と述べている。その形についてシュウレイと表現していることから、富士山の美しさを形容した表現と推測できるので、「秀麗」が適切である。

(41) 正解 D

空所の直前にある「規則正しく」、空所の直後にある「順序正しく」という表現に注目する。空所の前後で似た表現が用いられているため、換言の接続詞である「すなわち」が適切である。

(42) 正解 C

下線部分の直前に「それゆえ」という理由を表す接続詞があり、その前に理由が述べられていると推測できる。

- ア 11行目に「他の高山に比べて植物の少ない方である」と述べられているので、適切ではない。
- イ 「一夜にしてできた山」という記述はないので、適切ではない。
- ウ 下線部分の直前に、「植物帯がじつに順序正しく山の周囲を廻って生えている」という記述があり、さらに前文に「山型がきわめて単純」「植物帯の分布が非常に規則正しく」と述べられているので、適切である。

(43) 正解 F

下線部分の直後に「そこには」という指示語があり、それ以降で「山麓帯」に関する説明がされていると推測できる。

- ア 下線部分の後文に「少しく登ると森林帯となる」という記述があり、その2文あとに「その上が灌木帯となる」と述べられていることから、灌木帯は山麓帯の下にはない。したがって、適切ではない。
- イ 下線部分の直後に「主にふつうの草が生えている」という記述があるので、適切である。
- ウ 下線部分の後文に「少しく登ると森林帯となる」という記述があるので、適切である。

(44) 正解 B

- ア 1行目に「ときどき大爆発した」という記述があるが、「永い永い間気長くゆるゆる噴火」「噴出物を投げ出し投げ出した」「それがだんだん積もり積もり」して今日の形容になったと述べられているので、適切ではない。
- イ 12行目に「富士に欠けているもの」として「はいまつがない」「がんこうらんがない」という記述がある。また、同じ段落の結びで「富士の比

較的新しい山であるということが分かる」と述べられているので、適切である。

ウ 28行目に「ふつうの草木は富士の絶頂にないとは言える」と述べられているので、適切ではない。「絶頂に植物がある」と述べているまでである。

(45) 正解 A

空所の前では、31行目に「演奏家は楽譜を通して、音楽と同時に自分を表現」し、「科学にもこの作業が必要」と述べられている。そして、空所の直後の「本来なら音楽も作曲家が演奏者でもある、シンガーソングライターが原点」へと続いている。ここで「演奏家(者)」に注目して文章をつなげると、「演奏家が自分を表現」し、「本来なら作曲家が演奏者である」という追加情報が述べられていることがわかるので、「しかも」が適切である。「それに」は前後が対等な関係のときに使える接続詞であり、適切ではない。

(46) 正解 D

「役に立つ」は、第1段落で「その意味をていねいに考える必要があります」と述べられている。したがって、それ以降で「役に立つ」という言葉について考察されていると推測できる。

アとイは、7行目に「新しい科学技術開発……経済成長を求めているものになっています」と述べられており、続けて「その必要性を否定はしません」と述べられている。ウは、10行目に「科学の本来の姿は、自然と向き合うこと」と述べられており、「社会」ではない。

(47) 正解 C

下線部分の直後に「必要で十分な事柄を書く」という表現があるので、論文を書くことについて述べられていると推測できる。下線部分の直前に「論文は、分野を同じくしている専門家に理解されればよい」と述べられており、「専門家に理解される」ためにと考えるのが適切である。

(48) 正解 F

下線部分の直前に「作家や画家や音楽家が自分の作品を世に出すときに、**コミュニケーターを求めたりするだろうか**」と述べられており、そう考えると「今の科学のありようの不自然さ」が見えてくると続いている。したがって、「**コミュニケーターを必要とすること**」は適切である。アは12行目に「科学を文化とするなら、……科学が社会の中に存在したことになる」と述べられており、科学を文化とするなら、**社会の中に存在することは不自然ではない**。イは、科学の発信方法としての論文について、20行目に「論文は重要な発信方法ですが、……特殊な形での発信」であり、「**小説や絵や音楽とはまったく違います**」と述べられているので、科学のありようの不自然さを表しているといえる。

(49) 正解 B

文中では、演奏家が楽譜を通して自分を表現するように、**科学者も「コミュニケーターでなく表現者」であるべき**と述べられている。それにより、**第3段落の不自然さや第4段落の問題**が解決すると筆者は考えている。

ア 「科学が科学技術と同じものになり」とは述べられていないので、適切ではない。

イ 12行目に「音楽を聴くのと同じように、……科学が社会の中に存在したことになる」と述べられている。**科学を文化として扱い、音楽と同じように表現することが必要**と述べられているので、適切である。

ウ 20行目に「論文は……あまりにも限定された対象への特殊な形での発信」と述べられているが、科学者が表現者になることで論文がどのように受けとめられ、評価されるようになるかの記述はないので、適切ではない。

(50) 正解 B

文章挿入の問題は、**挿入文にある語句に注目**する。「科学」「科学技術」「文化」という語句について触れているのは第2段落で、「(2)」が適切である。「(1)」では「文化」について触れておらず、「(3)」では「科学のありようの不自然さ」の話題へと移行しているため、適切ではない。

検査Ⅱ 非言語能力適性検査 解答・解説

▶本文
180～192ページ

(1) 正解 E

B社の2020年度の売上総額から2010年度の売上総額を引くと、いくら多いかわかる。B社の売上総額は2010年度が231百万円、2020年度が892百万円なので、 $892 - 231 = 661$ (百万円)。

(2) 正解 C

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{C社の2020年度の売上総額}}{\text{C社の2010年度の売上総額}}$$

C社の売上総額は2010年度が566百万円、2020年度が741百万円なので、 $741 \div 566 = 1.30\cdots \rightarrow 1.3$ (倍)。

(3) 正解 E

E社の2020年度における東京での売上高を x と置くと、すべての営業所の売上高の合計が売上総額となるので、 $x + 308 + 274 + 495 + 225 = 1638$ これを解くと、 $x = 336$ (百万円)。

(4) 正解 F

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{A社の大阪での売上高}}{\text{A社の2010年度の売上総額}}$$

A社の2010年度における売上総額は1250百万円、大阪での売上高は410百万円なので、 $410 \div 1250 = 0.328$ 百分率にして、32.8 (%)。

(5) 正解 F

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{B社の愛知での売上高}}{\text{D社の大阪での売上高}}$$

2010年度におけるB社の愛知での売上高は17百万円、D社の大阪での売上高は189百万円なので、 $17 \div 189 = 0.0899\cdots$ 百分率にして、8.99... $\rightarrow 9.0$ (%)。

(6) 正解 D

T市の店舗数は、合計店舗数からP市、Q市、R市、S市の店舗数を引いて求める。

$$1040 - (316 + 234 + 192 + 157) = 1040 - 899 = 141 \text{ (店)}。$$

(7) 正解 F

S市の売上金額を x (万円) と置く。

$$\text{割合} = \frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}}$$

基にする量は合計金額、比べられる量はS市の売上金額。

$$0.148 = \frac{x}{56000}$$

$$x = 56000 \times 0.148 = 8288 \text{ (万円)}。$$

(8) 正解 D

$$\text{割合} = \frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}}$$

基にする量は合計店舗数、比べられる量はQ市の店舗数。

$$\frac{234}{1040} = 0.225 = 22.5 \text{ (\%)}$$

小数点以下第1位を四捨五入して、**23** (%)。

(9) 正解 F

$$\text{増加率} = \frac{\text{今年} - \text{前年}}{\text{前年}}$$

前年の売上金額は17498万円、今年の売上金額は18548万円なので

$$\frac{18548 - 17498}{17498} \div 0.0600 \dots \text{ 百分率にして、} 0.06 \dots \rightarrow \mathbf{6} \text{ (\%)}。$$

(10) 正解 H

$$1\text{店舗あたりの売上金額} = \frac{\text{売上金額}}{\text{店舗数}}$$

R市の売上金額は9504万円、店舗数は192店なので

$$\frac{9504}{192} = 49.5 \text{ (万円/店)}。$$

(11) 正解 C

電車を利用するのは、7人の班 $\times 1 = 7$ (人)。

バスを利用するのは、8人の班 $\times 2 = 16$ (人)。

電車は1人240円、バスは1人280円なので、

$$240 \times 7 + 280 \times 16 = 1680 + 4480 = 6160 \text{ (円)}。$$

(12) 正解 F

8人の班はタクシー2台、10人の班はタクシー3台が必要になる。

8人の班が4つ、10人の班が1つタクシーを利用するので、

タクシーの台数は、 $2 \times 4 + 3 \times 1 = 11$ (台)。

タクシー1台は1680円なので、合計料金は、 $1680 \times 11 = 18480$ (円)。

(13) 正解 D

旅館から旅館の最寄り駅まで、距離が450m、歩いた時間が6分から、

速さ (m/分) を求める。

$$\text{速さ} = \text{距離} \div \text{時間} = 450 \div 6 = 75 \text{ (m/分)}。$$

(14) 正解 C

電車の速さが時速36km、乗った時間が35分から、

距離 (km) を求める。

時速を分速に変換すると、 $36 \text{ (km/時)} \times 1000 \div 60 = 600 \text{ (m/分)}。$

距離 = 速さ \times 時間 = $600 \times 35 = 21000$ (m) kmに変換して、21 (km)。

(15) 正解 E

神社の最寄り駅から神社まで、距離が720m、歩く予定の時間が9分から、歩く速さ (m/分) を求める。

速さ = 距離 ÷ 時間 = $720 \div 9 = 80$ (m/分)。

速さ80 (m/分) で16分歩いたので、実際に歩いた距離は、

距離 = 速さ × 時間 = $80 \times 16 = 1280$ (m) kmに変換して、1.28 (km)。

(16) 正解 A

アンケートに回答した生徒116人のうち、飲食の屋台で買い物をした生徒は68人なので、買い物をしなかった生徒は、 $116 - 68 = 48$ (人)。

ゲームの屋台で遊んだ生徒は52人なので、遊ばなかった生徒は、 $116 - 52 = 64$ (人)。

「買い物をしなかった生徒」は「遊ばなかった生徒」の何倍かなので、
「買い物をしなかった生徒」 ÷ 「遊ばなかった生徒」 = $48 \div 64 = 0.75$ (倍)。

(17) 正解 G

飲食の屋台で買い物をした生徒と、ゲームの屋台で遊んだ生徒についての表を作成する。

屋台で飲食もゲームもした生徒 (飲食○・ゲーム○) が回答者全体の25%なので、

$116 \times 0.25 = 29$ (人)。

問われているのは屋台で飲食もゲームもしなかった生徒 (飲食×・ゲーム×) なので、色のマス。

逆算してマスを埋めていくと、25 (人)。

		ゲーム		計
		○	×	
飲食	○	29	39	68
	×		25	48
計		52	64	116

(18) 正解 B

1人目が当たり、続けて2人目も当たる確率は、積の法則により、

$$\frac{3}{10} \times \frac{2}{9} = \frac{1}{15}$$

(19) 正解 D

1人だけ当たる確率は、

$$\textcircled{1} \text{ 1人目当たり} \rightarrow \text{2人目はずれ} \quad \frac{3}{10} \times \frac{7}{9} = \frac{7}{30}$$

$$\textcircled{2} \text{ 1人目はずれ} \rightarrow \text{2人目当たり} \quad \frac{7}{10} \times \frac{3}{9} = \frac{7}{30}$$

の2通りがある。したがって、求める確率は、

$$\frac{7}{30} + \frac{7}{30} = \frac{7}{15}$$

(20) 正解 C

縁日で使った金額は、支出の総額の $\frac{1}{3}$

家族へのお土産代は、支出の総額の $\frac{7}{15}$

残りが交通費の総額となるので、 $1 - \frac{1}{3} - \frac{7}{15} = \frac{15}{15} - \frac{5}{15} - \frac{7}{15} = \frac{3}{15} = \frac{1}{5}$

(21) 正解 E

家族へのお土産代は、支出の総額の $\frac{7}{15}$

祖父母へのお土産代は、そのうちの半分なので、 $\frac{7}{15} \times \frac{1}{2} = \frac{7}{30}$

縁日で使った金額は、支出の総額の $\frac{1}{3}$

飲食の屋台で使った金額は、そのうちの $\frac{5}{8}$ なので、 $\frac{1}{3} \times \frac{5}{8} = \frac{5}{24}$

したがって、「祖父母へのお土産代」が「飲食の屋台で使った金額」の何倍かを

考えると、 $\frac{7}{30} \div \frac{5}{24} = \frac{28}{25}$

(22) 正解 E

I の情報より $D > A$ 、II の情報より $B = C + 1$ がいえる。4人の年齢は異なるので、BとCの間に入る人はいない。考えられる順番は、次の3パターン。

① $B > C > D > A$

② $D > B > C > A$

③ $D > A > B > C$

各推論を検証する。

ア Cが4人の中で最も若いのは、③のパターンが該当するので、**必ずしも誤りとはいえない**。

イ Aが4人の中で2番目に若いのは、該当するパターンがないので、**誤り**。

ウ BがDより若いのは、②と③のパターンが該当するので、**必ずしも誤りとはいえない**。

(23) 正解 B

IVの情報より、考えられるパターンは①の $B > C > D > A$ に絞られる。

また、Vの情報より $E = C + D$ であり、BとCの間に入る人はいないので、Eも含めた5人のパターンは $E > B > C > D > A$ または $E = B > C > D > A$ となる。各推論を検証する。

カ 5人の中でCが2番目に若いのは、Cは3番目なので、**誤り**。

キ $B + C > E$ であり、 $E = C + D$ を代入すると、 $B + C > C + D$ 、つまり $B > D$ となる。これはパターンと一致するので、**必ずしも誤りとはいえない**。

ク $A + B > E$ であり、 $E = C + D$ を代入すると、 $A + B > C + D$ 。

$B = C + 1$ を代入すると、 $A + C + 1 > C + D$ 、つまり $A + 1 > D$ となる。これはIの情報の $D > A$ に矛盾するので、**誤り**。

(24) 正解 F

白菜の仕入れ値は450円であり、仕入れ値の12%が利益になるので、タイムセールの中の利益は、 $450 \times 0.12 = 54$ (円)。

1玉54円の利益になるように価格を設定すると、仕入れ値+利益で、タイムセールの中の価格は、 $450 + 54 = 504$ (円)。

定価の80%がタイムセールの中の価格になるので、定価を x と置くと、 $x \times 0.8 = 504$ これを解くと、 $x = 630$ (円)。

(25) 正解 D

玉ねぎの定価を x と置くと、タイムセールの間は定価の80%になるので、タイムセールの中の価格は $0.8x$ と表せる。

通常時との利益の差は、 $x - 0.8x = 0.2x$ 。これが48円となるので、 $0.2x = 48$ これを解くと、 $x = 240$ (円)。

問われているのは、タイムセールの中の玉ねぎ1パックの価格なので、 $240 \times 0.8 = 192$ (円)。

(26) 正解 F

高校生の回答者のうち、睡眠時間が7時間以上～9時間未満と答えた人は1240人。

高校生全体は5000人なので、
5000人が「基にする量」、1240人が「比べられる量」となり、
 $1240 \div 5000 = 0.248$ 百分率にして、24.8 (%)。

(27) 正解 F

大学生の回答のうち、回答者の割合が最も高い項目は、5時間以上～7時間未満の1750人。

最も低い項目は9時間以上の350人。その差は $1750 - 350 = 1400$ (人)。

大学生全体は5000人なので、
5000人が「基にする量」、1400人が「比べられる量」となり、
 $1400 \div 5000 = 0.28$ 百分率にして、28.0 (%)。

(28) 正解 G

大学生の回答者のうち、睡眠時間が「7時間未満」と答えた人数は、「3時間未満」「3時間以上～5時間未満」「5時間以上～7時間未満」と答えた人数の合計となる。

したがって、 $480 + 1450 + 1750 = 3680$ (人)。

(29) 正解 D

回答者のうち、睡眠時間が「9時間以上」と答えた人数は、
高校生が440人、大学生が350人なので、合計は $440 + 350 = 790$ (人)。

回答者は高校生+大学生 = $5000 + 5000 = 10000$ (人) なので、
10000人が「基にする量」、790人が「比べられる量」となり、
 $790 \div 10000 = 0.079$ 百分率にして、7.9 (%)。

(30) 正解 B

筆記試験および実技試験の受験の有無で表を作成する。

問われているのは、色のマス。逆算してマスを埋めていくと、17 (人)。

		実技試験		計
		○	×	
筆記試験	○	78	$117 - 78 = 39$	117
	×		$56 - 39 = 17$	
計		94	$150 - 94 = 56$	150

よって、筆記試験も実技試験も受験しなかった人数は17 (人)。

(31) 正解 E

合格者についての表を作成する。

問われているのは、色のマス。

		実技試験		計
		○	×	
筆記試験	○	57	$69 - 57 = 12$	69
	×	$65 - 57 = 8$		
計		65		150

よって、筆記試験と実技試験のいずれか一方だけ合格した人数は、 $12 + 8 = 20$ (人)。

検査 I 言語能力適性検査

解答・解説

▶ 本文
194～209ページ

(1) 正解 C

「未知」はまだ知られていないこと、あるいは知らないこと。反意関係にあるのは「既知」であり、既に知られていること、あるいは知っていること。「未」と「既」の漢字を見れば解きやすい。「既成」は既にでき上がっていること。

(2) 正解 A

「軽率」は深く考えずに判断したり行動したりすること。反意関係にあるのは「慎重」であり、注意深く、軽々しい行動をしないことである。「軽妙」は気が利いていておもしろいこと、「謹慎（きんしん）」は言動を控えめにすること。

(3) 正解 B

「平凡」はごく普通のこと。反意関係にあるのは「非凡」であり、普通より特に優れていることである。「奇抜」も反意関係にある。「凡庸」は優れた点がないことで、「平凡」と同意関係にある。「不平」は納得できず不満があること。

(4) 正解 D

「短縮」は時間や距離などを短く縮めること。反意関係にあるのは「延長」であり、時間や距離などを延ばすことである。「縮小」は縮めて小さくすることであり、大きさなどに対して用いられる。

(5) 正解 D

最初に提示された2語の関係を把握し、同じ関係にあるものを選択肢から選ぶ。「普及」は広く行き渡ること、「流布（るふ）」は広く知れ渡ることであり、「左と右が似た意味を持つ」という同義の関係にある。「驟雨（しゅうう）」は突然降り始めて、まもなくやむ雨のこと。似た意味を持つのは「村雨（むらさめ）」であり、「通り雨」も同義の関係にある。「村雨」の意味がわからなくても、ほかの選択肢を見れば消去法で解答できる。

(6) 正解 C

「千円札」は「紙幣」の一種であり、「左が右を含む」という包含関係にある。この場合は「紙幣」が「千円札」を含む関係になる。

「燃料」に含まれるものは「石油」。「マッチ」は火をつけるための道具であり、「燃料」の一種ではない。

(7) 正解 A

「愚鈍」は頭が悪くてのろまなこと、「利発」は賢くて頭の回転が速いことであり、「左と右が反対の意味を持つ」という対義の関係にある。「喪失」は失うことであり、反対の意味を持つのは「獲得」。「取得」も対義語である。「阻喪（そそう）」は元気がなくなること。

(8) 正解 B

「粘土」は「土器」の原材料のひとつであり、「左は右から作られる」という原材料関係にある。「日本酒」の原材料のひとつは「米」。そのほか、水や麴（こうじ）なども日本酒の原材料である。

(9) 正解 D

すべての選択肢が「こじ」と読む語になっている。かたく辞退することは「固辞」。最初に挙げた語句の「かたく」に注目し、「固い」という漢字のあるCとDに絞る。次に「辞退する」に注目し、「辞」の漢字があるDを選ぶ。「固持」は意見などをかたく持ち続けること。

(10) 正解 A

幼児期に自然に身につける言語は「母語」。「国語」は近代国家においてその国の公用語とされる言葉のこと。「母国語」は母国の言葉のことであり、国籍や国家を基準としたものである。

(11) 正解 E

すべての選択肢が鳥に関することわざになっている。ほんのわずかであることは「雀(すずめ)の涙」。最初に挙げた語句の「わずか」に注目し、選択肢の中から一番小さなものを考えるとよい。「鶴(つる)の一声」は否応なく従わせる有力者の一言のこと。「烏(からす)の行水」は入浴時間が短いこと。「鶉(う)の目鷹の目」は利益や欠点などを熱心に探し出そうとするさま。

(12) 正解 B

物事が絶えず移り変わるさまは「有為転変」。「右往左往」はうろたえて混乱する様子。「支離滅裂」はばらばらで筋道が立たないこと。「日進月歩」は物事が絶えず進歩することで、移り変わる様子を意味した語ではない。「森羅万象」はこの世のあらゆる現象のことであり、それが移り変わる様子のことではない。

(13) 正解 A

個々の事例から原理を導き出す思考法は「帰納法」。「演繹法」は「帰納法」とは逆に、一般的な原理から個々の事例を導き出す思考法のこと。「弁証法」は対立する概念を統一し、さらに高度な結論を導き出そうとする思考法のこと。

(14) 正解 A

ある題目について大勢の前で話すことは「講演」。「演説」と混同しやすいが、「演説」は大勢の前で話すことは同じであるが、話す内容は自分の意見や主張である。「講義」は学問上の考えや成果、方法などを説いて教えること。

(15) 正解 B

世の中は無情な人ばかりではないことは「渡る世間に鬼はなし」。「人間到る処(ところ)青山あり」の「青山」は死に場所のことであり、骨を埋める場所はどこにでもあるのだから、大志を抱く者は故郷を出て大いに活躍すべきであるという意味。「情けは人の為ならず」は人に親切にすれば巡り巡って自分に返ってくるという教え。

(16) 正解 A

日常的に使用している外来語の意味が問われている。数量やデータを離散的な数値で表現することは「デジタル」。「アナログ」は数量の変化を連続的に表現すること。最近では「古いもの」を表すこともある。「ローカル」は地域を意味する語であるが、最近では局所的や限定的といった意味で使われることも多い。

(17) 正解 D

様子や態度がどことなく怪しい様子は「胡散臭(うさんくさ)い」。似た意味を持つ語として「胡乱(うろん)な」がある。「しどけない」は身なりなどがきちんとしていないさま。

(18) 正解 E

いいかげんに応対してその場をごまかすことは「お茶を濁す」。「言葉を濁す」と迷うかもしれないが、「言葉を濁す」は言葉のみに用い、「お茶を濁す」は言動どちらにも用いる。「お茶を挽(ひ)く」は客が来なくて暇なことをいう。

(19) 正解 A

国家や社会を超えて地球全体を一つの共同体ととらえる考え方は「グローバリズム」。単に「国際化」というだけの意味ではない。「キャピタリズム」は資本主義のこと。「ペシミズム」は悲観主義や厭世主義のこと。

(20) 正解 C

すべての選択肢が「きせい」と読む語になっており、最初に挙げた語句から見当をつける。きまりに従って正しく改めることは「規正」。「きまり」は「規則」のことであり、「規」の漢字があるAとCに絞る。次に「正しく」に注目し、「正」の漢字があるCを選ぶ。「氣勢」は意気込んでいる気持ちや勢いのこと。

(21) 正解 C

空所のあとに「さっぱり気づかずにいた」という表現があることから、練磨によって気づかずにいたことが気づけるようになるという文脈になる。「自然界の美しさに気づく」ために必要なこととして、「観察力」を入れるのが適切である。

(22) 正解 A

空所①の直前には「なぜ否定するかと言うことは説明も何もしていません」という表現があり、「言外」を入れるのが適切である。空所②の直前には「頭にして晦」とあり、「〇〇にして否定」がそれに対応していると考えられる。頭と晦は反対の意味の語句なので、空所には否定の反対の意味の言葉が入る。『それだけだ』が肯定文であることから「肯定」が適切である。

(23) 正解 A

空所の直前に「気持」という語があるので、外国滞在中に日本のことを考える気持がどうなったかが述べられていると推測する。日本から来る手紙などによって郷愁がますます強くなったと考えられるので、「拍車をかける」を入れるのが適切である。

(24) 正解 A

空所の前の文には「金と時間を費すこと」は「フザケタものである」、空所のあとの文には「〇〇でなければならぬ」とあり、仕事で金と時間を費やすことに対して否定的な意見が述べられている。したがって、空所には「無駄のない仕事の進め方」に関する語句が入ると考えられるので、「能率的」を入れるのが適切である。

(25) 正解 C

「AむしろB」という文の「A」の部分が空所になっている点に注目する。「むしろ」は、提示された二つのうちどちらかといえば、という意味の語である。Bの部分には、「行くのが好きか嫌いか」「その心もち」と、物事に応じて変わる心の状態が述べられている。Cの「意志」も心の状態を表す語であるが、「気分」や「気持ち」に比べると、志に従って物事を成し遂げようという積極的な心の動きを表すので、空所にはCの「意志」が入ると考えられる。

(26) 正解 B

冒頭に主張を述べ、その後に具体例をあげ主張を説明する構造になっていることを読み取る。具体例であげられている「柿」や「栗」の「渋味」や「渋い内皮」は、「自己を保護する」ためのものであり、人間も同様に、「渋面」を作るのは「他人との交渉を避け」ることだと展開している。自ら進んで他者との交渉をしないということから、空所②には「消極的」が入ると考えられる。空所①は、空所②と対義になる語「積極的」を入れるのが適切である。

(27) 正解 B

「なぜ……しないの」という形は「否定疑問文」であると述べられている。本来、否定疑問文は、理由や根拠などを問うときに用いられるものであり、「説明を求める」ことがその機能である。したがって、BかDが適切であると推測できる。また、文頭で「なぜ」は「強制的な雰囲気を含んでいる」と述べられているので、「強要の言葉」として機能すると考えるのが適切である。

(28) 正解 C

下線部直後に「それに反して」という語がある点、下線部を含む文が「晴れた夜」と「冬の小雨」が降る「夜」の対比で書かれている点に注目する。「夜」の情景については、続く文で「近頃の詩人が殊更好む夜の調和」と述べられているので、これに対する「晴れた夜」は、詩人が好むものではないということになる。また、「模糊として」や「何れが～見定め得ず」などの表現から「夜」の情景がはっきりしないものであることがわかる。これらから、「晴れた夜」は、風景がはっきりしていること、詩人の興味を引くものではないこと、一方「冬の小雨」の「夜」は、風景がはっきりしないこと、詩人の興味を引くものであることになるので、Cが正解となる。

(29) 正解 A

雪の結晶について、天然の雪にも不規則なものがあると述べた文である。「矢張り天然にもちゃんとある」「快心の失敗作」という表現から、失敗作が見つかるという選択肢が適切である。「同種のもの」と「失敗の色々な段階のもの」はいずれも失敗作について述べているため、「しかも」で接続するのが自然である。

(30) 正解 E

下線部分は、前文を具体的に説明した文である。つまり、「正面（顔）のないモノ」の具体例として「木」を持ち出して説明している。選択肢はいずれも接続詞だけが異なっているので、文のつながりを考えれば解答できる。下線部分は「木」を用いて前文を具体的に言い換えた文であり、また「話し手から遠い方」と「木の向こう側」も具体的な言い換えである。したがって、換言の接続詞「つまり」で接続するのが自然である。

(31) 正解 A

「優秀な芸術を造り出す」なら「優秀な科学」も造る素質があるという文脈である。「したがって」という順接の接続詞であれば、「芸術のある国には立派な科学が成り立つ」と続くのが自然である。ここでは「反面」という逆接の接続詞により、「芸術なき国」で「立派な科学は成り立ち得ないことをつなげるのが、文脈として最も自然である。

(32) 正解 D

下線部分の「経済」と「美味」は変わらないので、文のつながりを考える。下線部分の直前に「物を生かして美味しくいただける工夫」という表現があり、その工夫を具体的に述べたものではないので、「具体的に」は適切ではない。また、「あるいは」では「経済」と「美味」が両立せず、「よって」では経済かどうかで味が変わることになり、適切ではない。

(33) 正解 C

「肯定」の「肯」の漢字で「うべな（う）」と読む。意味は「もっともであると思うこと」「同意すること」。Aは「抗う」、Bは「厭う」、Dは「従う」、Eは「患う」または「煩う」。

(34) 正解 D

空所の前後に注目する。前文には「同じ気持ちになる」、後文には「感じるものがこんなにも違う」「違いを思い知らされる」という表現があり、前後で逆の内容が述べられている。したがって、逆接の接続詞「しかし」が適切である。

(35) 正解 E

(1)では「**理解**」の意味について述べられており、次の段落で「違いを思い知らされること」の具体例が挙げられていると考えられる。また、(2)では「**納得**」について述べられており、次の段落の「このように、『納得』には」と続くので、挿入文を入れる余地がない。(3)では19行目に「そんなにかんたんにわかられてたまるか」という表現があるので、挿入文を入れると重複した内容になってしまう。(5)では「**聴く**」ことについて述べられているが、「話そうとして話さきれない」「聴いてもらえるだけでいい」という表現から、「聴く」ことに「理解は起こらなくていい」と述べられている。つまり、わかってもらうことを前提としておらず、「わかられたら逆に腹が立つ」という文が自然につながる。

(36) 正解 A

「離婚の調停」「訴え合い」は比喩ではないため、選択肢から外れる。**格助詞「の」**でつながっているときは、「の」の前後の語句を見ると、言い換えの表現を見つけやすい。言い換えの表現は、対象となる語句の近辺で用いられることが多いので、まずは同じ段落から探す。下線部分の直後の「**果て**」という語句に**注目**すると、同じ文の後半に「**果てしなく**」という表現があるので、「**修羅場**」が比喩的に使われていると推測できる。

(37) 正解 B

「聴く」ことについては第7段落で述べられている。「話そうとして話さきれないその疼きを聴く」という表現があるので、イは適切である。

ア 「相手と同じ気持ちになること」は、第1段落で「**理解ではない**」と述べられているので、適切ではない。

ウ 「『わかる、わかる』と言葉を返すこと」は、第4段落で「**話し手が頑になる**」と述べられているので、適切ではない。

(38) 正解 F

- ア 「納得」については第3段落と第4段落で述べられている。17行目に「事態の理解、事態の解決には尽きないものが含まれている」と述べられているので、適切ではない。
- イ 「理解」については第1段落で述べられている。「理解」は「違いを思い知らされること」と述べられているので、適切である。
- ウ 31行目の「その事態に自分とは違う立場からかかわるひととの関係のあり方をめぐって生まれる心持ち」という表現から、適切である。

(39) 正解 D

「景色」はふつう「けしき」と読む。

(40) 正解 B

「いたずらに」は存在や動作などが無益であるさまを意味する。従って、Bの「**むだに**」が適切である。

(41) 正解 A

空所の前の一文「もとより細い筒であるから、火は高くあがらない。」に注目する。子供が遊ぶ花火であるから、高くあがるものではない、あがったとしても二階家の屋根くらいの高さだ、という文脈である。「せいぜい」は「**多く見積もってもその程度だろう**」という気持ちを表すときに用いる。

(42) 正解 E

「AのようなB」という表現技法は、**直喩法**である。読者に**Bを説明するためにAを提示する**という方法である。

(43) 正解 A

東京の夏らしい気分を作り出すものとしてあげられているものの中に「虫籠」があり、「子供の小さい花火」は、この虫籠を持つ若い娘の行く先を照らすようだと述べられている。

Bは、「まわり灯籠や組あげ灯籠に比べて明るさが弱く」が不適。明るさの比較はしていない。

Cは、「蚊いぶしの煙を上回るほどの煙を出すのであたり一面霧がかかったようになり、幻想的な夜の雰囲気になる」が不適。

Dは、「暗闇を強調する役割」が不適。「うす暗い夜の町」という記述がある。

Eは、「短い夏の夜を連想させる」が不適。「まことに呆気ないもの」と述べられているが、それは「涼しげな気分を誘い出すもの」であり、「短い夏の夜を連想させる」ものではない。

(44) 正解 F

ア 「夏の季語」が不適。

イ 正しい。

ウ 正しい。

(45) 正解 A

下線部分の前文に「微生物は肉眼で見ることはできません」という表現があり、直前の「サイズ」「眼」、直後の「度」「小さい」という語句から、微細なものを見るときに用いられる尺度であると推測できる。したがって、「解像」が適切である。「解像度」は精細さを表す尺度のこと。

(46) 正解 C

空所を含む文の末尾に「小さいからです」という表現があることから、原因や理由を表す接続詞が入ると推測できる。したがって、「なぜなら」が適切である。接続詞や副詞に続く文は、末尾が決まった形になるものがあり、たとえば「まるで」は「ようである」、「ぜんぜん」は「ない」となることが多い。

(47) 正解 A

理由が問われているときは、下線部分の近辺で述べられていることが多いので、まずは同じ段落から探す。

- ア 直前に「これはタンパク質に含まれる硫黄成分に由来します」と述べられているので、理由として適切である。
- イ さらに前の文に「彼ら（微生物）の代謝と増殖活動の結果として、酸や嫌な匂いがします」と述べられている。しかし、「粘液物質と嫌な匂いの関係については述べられていない」ので、適切ではない。
- ウ 「肉眼で見ることができない」ことと「匂いがする」ことを関連付ける説明がないので、適切ではない。

(48) 正解 C

第2段落の下線部分の前後に注目する。5行目に「少々条件が悪くとも増殖が可能」とは述べられているが、「生育条件は必要なく増える」とは述べられていない。4行目にも「栄養と温度などの生育条件を整えば」という表現がある。したがって、Cは適切ではない。

(49) 正解 D

17行目の「このような腐敗現象」という表現の前後に注目する。

- ア 直後に「微生物にとって栄養素になるものがあって、その場に付着……増殖を開始することによって起こる」と述べられており、適切である。
- イ 「このような」が指すものを考えると、直前の段落の「代謝と増殖活動の結果として、酸や嫌な匂いがします」や「粘液物質、毒素などが作り出される」といった表現が該当するので、適切である。
- ウ 11行目に「天文学的数字にまで爆発的に増殖できる」という表現があるが、腐敗現象について説明されたものではないので、適切ではない。

(50) 正解 E

下線部分の直前に「腐敗現象を発酵現象に変えることができます」という表現がある。「この二つ」とは「腐敗現象」と「発酵現象」を指しており、その二つに共通するのは「増殖プロセス」であると読み取れる。

ア 下線部分の直前の段落で、「微生物の増殖プロセス、という点では全く同じ生命現象」という表現があり、筆者は「増殖プロセス」という点で「生命現象」を述べていることがわかる。増殖については、4行目に「栄養と温度などの生育条件が整えば急速に増殖を開始」という表現があり、腐敗も発酵も同じプロセスであると述べられている。

イ 腐敗現象としては粘液物質や毒素などが作り出されるが、発酵現象としては人間にとって益をなすものである。また、進化の過程については触れられていないので、適切ではない。

ウ 微生物の生命現象とは増殖プロセスのことであり、下線部分の直前に「微生物を選択し、環境をうまく整えると、腐敗現象を発酵現象に変えることができます」と述べられている。

検査Ⅱ 非言語能力適性検査 解答・解説

▶ 本文
210～223ページ

(1) 正解 D

動物園の来場者数と前月来場者数から増加した人数を計算する。
動物園の来場者数は7325人、前月来場者数は7056人なので、
 $7325 - 7056 = 269$ (人)。

(2) 正解 F

美術館の前月来場者数は、前月来場者数の合計からほかの施設の前月来場者数を引けばよい。
したがって、 $24518 - 4642 - 7056 - 7968 = 4852$ (人)。

(3) 正解 E

動物園の来場者数と博物館の来場者数から計算する。

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{動物園の来場者数}}{\text{博物館の来場者数}}$$

動物園の来場者数は7325人、博物館の来場者数は4874人なので、
 $7325 \div 4874 = 1.50\cdots \rightarrow 1.5$ (倍)。

(4) 正解 B

来場者数の合計と美術館の来場者数から計算する。

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{美術館の来場者数}}{\text{来場者数の合計}}$$

美術館の来場者数は4240人、来場者数の合計は25241人なので、
 $4240 \div 25241 = 0.167\cdots$ 百分率にして、 $16.7\% \rightarrow 17\%$ 。

(5) 正解 C

博物館の来場者数と前月来場者数から計算する。

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{博物館の来場者数}}{\text{博物館の前月来場者数}}$$

博物館の来場者数は4874人、前月来場者数は4642人なので、
 $4874 \div 4642 = 1.0499\cdots$ 百分率にして、 $104.99\% \rightarrow 105.0\%$ 。
問われているのは増加率なので、 $105.0 - 100.0 = 5.0$ (%)。

(6) 正解 C

美術館の来場者数は4240人、月間営業日数は21日であり、
21日で4240人が来場しているので、1日あたりは、
 $4240 \div 21 = 201.9\cdots \rightarrow 202$ (人)。

(7) 正解 D

動物園の増加率は+3.8%なので、来月の来場者数が今月と同じ増加率で増え
るとすると、来月は $1 + 0.038 = 1.038$ 倍に増えることになる。
動物園の今月の来場者数は7325人なので、
来月の来場者数は、 $7325 \times 1.038 = 7603.35 \rightarrow 7603$ (人)。

(8) 正解 A

営業日数が同じなので、前月の水族館の営業日数は30日。
今月と前月の来場者数の差を営業日数で割ればよい。
水族館の来場者数は8802人、前月来場者数は7968人なので、
 $(8802 - 7968) \div 30 = 27.8 \rightarrow 28$ (人)。

(9) 正解 C

アンケートを行った学生は理系250人、文系150人なので、
 $250 + 150 = 400$ (人)。
そのうち、論文を執筆したことがあると答えた学生は45%なので、
論文を執筆したことがあると答えた学生は、 $400 \times 0.45 = 180$ (人)。
複数の論文を執筆したことがあると答えた学生はそのうちの15%なので、
 $180 \times 0.15 = 27$ (人)。

(10) 正解 C

論文を執筆したことがあると答えた学生は45%なので、論文を執筆したことがないと答えた学生は55%になる。

つまり、 $400 \times 0.55 = 220$ (人)。

在学中に論文を書く予定がないと答えた学生はそのうちの20%なので、 $220 \times 0.2 = 44$ (人)。

$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{在学中に論文を書く予定がないと答えた学生}}{\text{アンケートの対象者全体}}$

$44 \div 400 = 0.11$ 百分率にして、**11** (%)。

(11) 正解 A

最初の月+次の月+3か月目 = $\frac{1}{2}$ となる。

3か月目に書いた量を x と置くと、最初の月が $\frac{1}{7}$ 、次の月が $\frac{1}{4}$ なので、

$$\frac{1}{7} + \frac{1}{4} + x = \frac{1}{2}$$

これを解くと、 $x = \frac{3}{28}$

(12) 正解 C

論文執筆にかかった期間の7か月を、最初の月+残り6か月として考える。

最初の月に全体の $\frac{1}{5}$ を書いたので、残りは $\frac{4}{5}$

これを残り6か月で毎月同じ量だけ書いたの、均等に割ればよい。

したがって、2か月目に書いた量は $\frac{4}{5} \div 6 = \frac{2}{15}$

(13) 正解 B

商品Wの仕入れ値は280円で、仕入れ値に3割の利益を乗せるので、
商品Wの1個当たりの利益は、 $280 \times 0.3 = 84$ (円)。

商品Wを45個仕入れて全部売り切ったので、
利益の総額は、 $84 \times 45 = 3780$ (円)。

(14) 正解 G

商品Xを50個売ると、売上は31850円なので、
商品Xの1個当たりの定価は、 $31850 \div 50 = 637$ (円)。

問われているのは商品Xの仕入れ値である。

定価は仕入れ値に3割の利益を乗せた金額なので、仕入れ値を x と置くと、
 $1.3x = 637$ これを解くと、 $x = 490$ (円)。

(15) 正解 D

商品Yの定価を x と置くと、20%引きが468円なので、

$$x \times (1 - 0.2) = 468$$

これを解くと、 $x = 585$ (円)。

定価は仕入れ値に3割の利益を乗せた金額なので、仕入れ値を y と置くと、

$$y \times 1.3 = 585$$

これを解くと、 $y = 450$ (円)。

定価 - 原価 = 利益より、 $585 - 450 = 135$ (円)。

(16) 正解 E

I の情報より $A = B + 20$ 、II の情報より $C = D + 30$ がいえる。

つまり、Aは20個以上、Cは30個以上売れたことがわかる。

また、AとCの合計は50個以上になる。これより、各推論を検証する。

ア $A + D = 30$ となる。Aが25個、Dが5個などの可能性が考えられるので、**必ずしも誤りとはいえない**。

イ $A + C = 40$ となる。Aは20個以上、Cは30個以上売れたので、**誤り**。

ウ $B + D = 10$ となる。Bが7個、Dが3個などの可能性が考えられるので、**必ずしも誤りとはいえない**。

(17) 正解 D

I と II の情報から、 $A > B$ 、 $C > D$ で、Aは20個以上、Cは30個以上。

売上個数の多い順で考えられるのは、次のパターン。

差が30個のCとDの両方が、差が20個のAとBの間に入ることはない。

つまり、 $A > C > D > B$ は成り立たないことに注意する。

① $A > B > C > D$

② $A > C > B > D$

③ $C > A > B > D$

④ $C > A > D > B$

⑤ $C > D > A > B$

カ Bが最少の場合は、④と⑤が考えられるので、決まらない。

キ Aが2番目の場合は、③と④が考えられるので、決まらない。

ク Cが最多の場合は、③と④と⑤が考えられるので、決まらない。

1つの情報だけでは決まらないため、2つの情報を組み合わせる。

カとキ Bが最少、Aが2番目の場合は、④のみあてはまる。

カとク Bが最少、Cが最多の場合は、④と⑤が考えられるので、決まらない。

キとク Aが2番目、Cが最多の場合は、③と④が考えられるので、決まらない。

(18) 正解 D

同時に玉を取り出すのは、順番に玉を取り出すのと同じことである。

最初に白玉を取り出す確率は、玉が全部で10個、白玉は3つなので $\frac{3}{10}$

次に白玉を取り出す確率は、玉が全部で9つ、白玉は2つなので $\frac{2}{9}$

積の法則により、両方とも白玉である確率は、 $\frac{3}{10} \times \frac{2}{9} = \frac{1}{15}$

(19) 正解 F

反対の出来事を考え、1から反対の出来事の確率を引く。

「少なくとも1つは赤玉」の反対の出来事は「両方とも赤玉ではない」。

最初が赤玉ではない確率は $\frac{5}{10}$ 、次が赤玉ではない確率は $\frac{4}{9}$

積の法則により、両方とも赤玉ではない確率は、 $\frac{5}{10} \times \frac{4}{9} = \frac{2}{9}$

したがって、「少なくとも1つは赤玉」である確率は、 $1 - \frac{2}{9} = \frac{7}{9}$

(20) 正解 B

コースの距離が5km、走った時間が32分から、速さ (m/分) を求める。

kmをmに変換すると、 $5 \text{ (km)} \times 1000 = 5000 \text{ (m)}$ 。

速さ = 距離 ÷ 時間 = $5000 \div 32 = 156.25 \text{ (m/分)} \rightarrow 156.3 \text{ (m/分)}$ 。

(21) 正解 F

往路の時間と復路の時間をそれぞれ計算する。

中間地点で折り返すので、往路と復路はともに6kmである。

往路は、走った速さが時速10kmなので、

$$\text{時間} = \text{距離} \div \text{速さ} = 6 \div 10 = \frac{6}{10} \text{ (時間)}。$$

時間を分に変換すると、 $\frac{6}{10} \times 60 = 36$ (分)。

復路は、走った速さが時速9kmなので、

$$\text{時間} = \text{距離} \div \text{速さ} = 6 \div 9 = \frac{2}{3} \text{ (時間)}。$$

時間を分に変換すると、 $\frac{2}{3} \times 60 = 40$ (分)。

したがって、合計すると、 $36 + 40 = 76$ (分)。

(22) 正解 D

コースの距離が21km、走った時間が1時間24分から、

速さ (km/時) を求める。

1時間24分を分数にして計算すればよい。

$$1 \text{ 時間 } 24 \text{ 分} = 84 \text{ 分} = \frac{84}{60} \text{ 時間} = \frac{7}{5} \text{ 時間となる。}$$

$$\text{速さ} = \text{距離} \div \text{時間} = 21 \div \frac{7}{5} = 15 \text{ (km/時)}。$$

(23) 正解 A

学生は2割引になるので、学生が中級者の部に参加したときの参加費は、

$$2500 \times (1 - 0.2) = 2000 \text{ (円)}。$$

学生6人が参加するので、 $2000 \times 6 = 12000$ (円)。

(24) 正解 D

学生は2割引になるので、学生が初級者の部に参加したときの参加費は、 $1000 \times (1 - 0.2) = 800$ (円)。

保護者は通常の参加費であり、学生4人と保護者2人が参加するので、 $800 \times 4 + 1000 \times 2 = 5200$ (円)。

(25) 正解 D

男性についての表を作成して問題文を整理する。

問われているのは色のマス (単品・夜)。逆算してマスを埋めていくと、37 (人)。

男性	昼	夜	計
単品	27	37	64
定食	76	51	127
計	103	88	191

(26) 正解 D

女性についての表を作成して問題文を整理する。

問われているのは色のマス (単品・夜)。逆算してマスを埋めていくと、26 (人)。

女性	昼	夜	計
単品	56	26	82
定食	42	63	105
計	98	89	187

(27) 正解 F

問われているのは「昼・定食」の合計である。

(25) と (26) の表より、男性は76人、女性は42人。

したがって、 $76 + 42 = 118$ (人)。

(28) 正解 C

2015年における企業数の合計と、小売業の企業数を比較する。

企業数の合計は、 $48 + 42 + 29 + 19 + 16 + 13 + 33 = 200$ (社)。

小売業の企業数は42社なので、

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{小売業の企業数}}{\text{企業数の合計}} \text{より、}$$

$$42 \div 200 = 0.21 \text{ 百分率にして、} 21 \text{ (\%)。}$$

(29) 正解 A

2015年における医療・福祉業の企業数は16社、

2025年における製造業の企業数は42社なので、

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{2015年の医療・福祉業の企業数}}{\text{2025年の製造業の企業数}} \text{より、}$$

$$16 \div 42 = 0.38\cdots \rightarrow 0.4 \text{ (倍)。}$$

(30) 正解 G

2025年において建設業が占める割合と、不動産業が占める割合は、

いずれも基にする量が「2025年における企業数の合計」で同じになる。

したがって、それぞれの割合を出さず、建設業÷不動産業で求める。

建設業の企業数は28社、不動産業の企業数は17社なので、

$$28 \div 17 = 1.6470\cdots \text{ 百分率にして、} 164.7 \text{ (\%)。}$$

(31) 正解 F

2015年における情報通信業の企業数は19社、2025年における情報通信業の企業数は24社なので、

$$\frac{\text{比べられる量}}{\text{基にする量}} = \frac{\text{2025年の情報通信業の企業数}}{\text{2015年の情報通信業の企業数}} \text{より、}$$

$$24 \div 19 = 1.2631\cdots \text{ 百分率にして、} 126.3\%。$$

問われているのは増加率なので、 $126.3 - 100 = 26.3$ (%)。

